

戦旗

☆帝国主義国、植民地従属国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独一世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

12・7 政治集会に総結集せよ

日向一派—社会排外主義粉碎し 七〇年代、戦略的反攻がちとれ

全国の同志諸君、友人の皆さん！
日向一派の逃亡から一年半にしてわれわれは政治集会を開催する。全ての皆さんの圧倒的結集を訴える。

いま日本帝国主義は戦後世界体制の崩壊的危機の中で、絶望的危機をつのらせ、アジア侵略反革命を強権的に遂行せんとしている。田中退陣という混乱の中で、国内支配形態のポナパルティズムの転換へ向け暴力的反動的支配を強め、侵略反革命体制を何としても構築しようとしている。だがわれわれは絶対にこれを許しはしない。七十年代戦略的反攻を闘い取るために全戦線における闘いを強めていかなければならない。

七十年代中期の階級的攻防に耐えられぬ輩は既に社共・カクマルを先頭に社会排外主義へと雪崩を打って転落している。日向一派の放逐をもって純化し、強化されたが戦旗派—蜂起—プロ独派は、この社会排外主義者を粉碎し、戦略的反攻の最先頭で闘わねばならない。一年半の分派闘争の勝利の貫徹の成果を更に打ち固め、全戦線の闘いの前進を更に推し進めるため、全力量を政治集会の成功に傾注し、圧倒的成功をかち取らなければならない。

日向一派放逐の地平踏み固め 第三次ブント建設に勝利せよ

日向一派の放逐以降既に一年半の時が流れた。この一年半の間に日向一派はますますその階級の本質を明らかにしてきている。日向一派は分派闘争の公然たる開始後、三里塚現闘団からの逃亡、沖繩戦線からの逃亡—沖繩委員会の解体をはじめ、全戦線からの召還—逃亡を行ってきた。更に五・一三闘争をはじめとした一切の戦旗派の闘いを清算し、国際主義と暴力に裏打ちされたBUNDの歴史と伝統をかたくり捨て、カクマルの世界へのもぐり込みを公然と行なっているのである。彼らは又狭山闘争においてはカクマルとともに武装解除の方針を打ち出すという腐敗し切った姿をさらけ出したのである。そして現在に至っては、四ブロック・プロ青等とともに沼地派ブロックを形成し、社共にくさりついて延命を策さんとするに至っているのである。

このような日向一派の腐敗は決して偶然などではない。同盟七回大会—九回大会の意義を否定・清算せんとする彼らがたどるべき当然の道なのである。日向一派は、「共産主義

組合主義に純化し、路線的には日本帝国主義を美化し、「共同反革命」論に表現される帝国主義の絶対的美化に基づく啓蒙運動に明け暮れているのである。このような彼らが日帝の危機の延命をかけた支配形態・性格の暴力的・反動的再編をとらえ切れるわけもない。日向一派が「寺尾は石川氏を無罪にするだろう」と思い込み、十・三一狭山闘争に「無罪判決万才」のピラミッドを用意してくるという、文字通りの日帝に対する徹底した美化と合法主義ぶりは、けだし当然と言わなければならない。又、ここにこそ日向一派の同盟戦旗派からの逃亡の一切の根拠があったのである。七〇年代中期の階級攻防を階級激突へ向けて押しあげるのではなく、そしてそれに向けて党組織を全領域・全戦線において打ち鍛えるのではなく、平和的闘争形態と合法的活動にのみ全ての活動を限定し、「第三の試練」を悪無限の後退と党組織解体のための合言葉と化してしまわんとしたところに日向一派の逃亡の根拠があったのである。日向一派は現在に至っても、われわれとの分派闘争には「何の核心もなく」「何の意義もなく」「ただ足

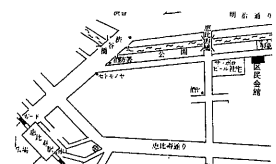
共産同(戦旗派)政治集会

基調報告 西田輝

あいさつ ● 三里塚芝山連合
● 空港反対同盟
● 沖繩解放同盟(準)

決意表明 ● 日本反帝戦線
● 全国労共闘
● その他

日時 12月7日
午後6時(5時半開場)
会場 新橋区民会館



立分派が不満分子であるからだ」と言いくるめようとしている。まさに日向一派にとって、分派闘争をそれとして認めることは、同時に自らの日和見主義を認め、路線的敗北を認めることに他ならず彼らにとっては絶対に認める事のできない事なのである。

現在の世界が「共同反革命」をもって帝国主義の千年王国的延命が許された世界などではなく、文字通りの崩壊の危機にたうつ帝国主義がその危機を侵略反革命(戦争)をもって延命せんとする世界である事、戦争と革命の時代であり、瞬時の油断が帝国主義国家権力による「上からの内乱」によって革命派の反撃と侵略反革命戦争の結果するという時代なのだから、言う事ははっきりと体の奥底までたたきこんでおかなければならないのである。

このような把握をガッチリと固め、それに基づいて党組織を強化し革命的戦術を駆使する事、この事をわれわれはこの一年半の間徹底して貫徹し戦略的反攻に向けてその陣型を整えてきた。われわれは更にこの現代過渡期世界の認識を深め、党を強化し革命的戦術の基礎を打ち固めなければならぬ。日向一派をはじめ、あらゆる社会排外主義者共の誤まった路線を徹底的に粉砕し、暴露しながら前進しなければならぬ。

日向一カクマルをはじめとした社会排外主義者は今後ますます帝国主義の絶対的美化論を押し進め、労働者階級人民内部に害毒を流して行く事であるが、われわれはこれを絶対に許さず更に強固な隊列をつくりあげていかなければならない。同盟七回大会一九回大会の意義を清算し、「共同反革命論」にしがみつく日向一派を粉砕しなければならぬ。

更に日向一派は現在党組織建設においても「純プロ主義」に完全に転落した。日本帝国主義の侵略反革命体制構築にとって最も重大な要としてある人民分断支配の攻撃を見抜けず、党組織を被抑圧人民・被差別人民内部に建設するとの決定的意義を何一つ省りみよらんとせず、部落民内部における党建設から逃亡し、沖繩委員会を解体し労働者サークルのみの建設を自己目的化する日向一派の腐敗は目をおおるものがある。彼らの「国際主義」とは口先だけのものに過ぎない。

「足立分派は青島協路線で純プロ主義だ」等のデマコギは既に事実によって粉砕されている。日向一派こそ「純プロ」の道を、カクマルの後を追っているのに他ならない。現在の自己の姿をわれわれに對する批判で陰蔽しようといふ彼らの目論見は全く惨めな破産をとげてしまったのである。

主義の絶対的美化論を押し進め、労働者階級人民内部に害毒を流して行く事であるが、われわれはこれを絶対に許さず更に強固な隊列をつくりあげていかなければならない。同盟七回大会一九回大会の意義を清算し、「共同反革命論」にしがみつく日向一派を粉砕しなければならぬ。

更に日向一派は現在党組織建設においても「純プロ主義」に完全に転落した。日本帝国主義の侵略反革命体制構築にとって最も重大な要としてある人民分断支配の攻撃を見抜けず、党組織を被抑圧人民・被差別人民内部に建設するとの決定的意義を何一つ省りみよらんとせず、部落民内部における党建設から逃亡し、沖繩委員会を解体し労働者サークルのみの建設を自己目的化する日向一派の腐敗は目をおおるものがある。彼らの「国際主義」とは口先だけのものに過ぎない。

「猛省・血債」が文字通りのものであるならば何故に逃亡したのが血債とは血であらう事であるならば、どうして同じ戦場に立つ事を拒むのか。同じ戦場に立ち、共に血を流さずして連帯も空語である。まさに彼らの「血債・猛省」とは、逃亡の合理化のための言葉に他ならない。

七〇年代中期階級激突戦へ 更なる全人民の党の建設を

日向一派の逃亡以降の一年半はわれわれにとって、労働者階級被抑圧人民の党として自己を徹底的に打ち鍛えるものであった。沖繩委員会を再建し、部落民内部に強固なケルンを構築し、労働者階級の最先頭で闘う党の建設こそわれわれの闘いであったのである。われわれは更にこの道を突き進まなければならぬ。まさに全人民の党を建設する事、これこそがわれわれの党建設でなければならぬのである。

「足立分派は青島協路線で純プロ主義だ」等のデマコギは既に事実によって粉砕されている。日向一派こそ「純プロ」の道を、カクマルの後を追っているのに他ならない。現在の自己の姿をわれわれに對する批判で陰蔽しようといふ彼らの目論見は全く惨めな破産をとげてしまったのである。

なしの沼地へと入り込んでしまったのである。この沼地を自己の安住の場とする日向一派に対してはわれわれはその安住を許すのではなくトコトン沈め切つてやらなければならぬ。二度と顔を浮び上げる事のできないように。歴史の歩みは何人もそれを止める事はできない。現代過渡期世界が戦争と革命の時代であり、世界プロレタリア独裁への歴史的過渡期であるならば、それを徹底して押し進めなければならぬ。それがわれわれの歴史的任務であり、使命であるのだから。

全戦線・領域の成果をもって 政治集会の勝利をかちとろう

第二に打ち取るべき事は、七五年を目前にして激化する日帝の侵略反革命の危機を攻撃的階級激突戦へ向けて、戦略的反攻を取すべく固く決意し切る事である。

十・三一狭山差別裁判闘争における日帝一寺尾の無実の部落青年石川一雄氏に対する無期懲役一差別・死刑攻撃に端的に示されるように、日帝は侵略反革命の遂行に向け、絶望的危機に身をふるわせながら自己の延命をかけた体制の重みをもって最後の挑戦に出てきている。六九年日米共同声明以降の全面化する危機の中で朝鮮植民地化攻撃を環としながら進行する日帝の侵略反革命の野望は、フォード来日、訪「韓」にも示された如く日帝一林体制の強化と侵略反革命戦争へと向わんとしている。フォード訪「韓」に時機を合わせたトンネル事件のデッチ上げを見ても、これこそ帝国主義ブルジョアジーの危機の延命のための最後の道である侵略反革命戦争へ突き進まんとする真の姿なのである。だが同時にそれはまた、朝鮮南半部人民の日帝一林に対する闘いの前進と昂揚に対する恐怖の表われでもあるのであり、又日帝の侵略

目的体制強化と戦線配置の時期、③潮流的分岐とわれわれの前進の時期の三期を通じて常に全人民の先頭に立ち闘いぬかんとしてきた。今や第三期はその頂点を迎え、潮流的分岐は更に鮮明な形で表われてきている。われわれはこの第三期を徹底して勝利しぬかなければならない。この決意を打ち固めることこそ、十二・七政治集会で成し切るべき第一の任務なのである。党組織建設における日向一派に對する勝利と路線的勝利をしっかりと確認し、七十年代中期戦略的反攻をかちとるべく、日向一派をはいに勝利しぬく決意を固める事、日向一派との分派闘争第三期の勝利を不動の確信として決意し切る事が必要なのである。

朝鮮植民地化攻撃一国内侵略反革命体制構築の環・人民分断支配を徹底的に粉砕し切らなければならぬ。現在日帝は侵略反革命体制の構築に向け統治形態の反動的暴力的転換をはからんとしており、警察的官僚的軍隊的独裁へと向わんとしている。経済的軍事化をねらい産軍複合体の強化を策しているのである。

国際階級闘争の戦略的攻撃的前進の前に未曾有の危機に陥り、露骨にその本性を表わす帝国主義に死を与えてやらなければならぬ。まさに問題は、国際階級闘争の前進に呼応し、日帝の侵略反革命の危機を戦略的攻撃一国内階級激突戦の勝利へと導くのか、それとも侵略反革命戦争への道を許すのか、このように立てられなければならぬ。傍観者・日和見主義者は権力の上からの内乱」によって苦もなく鎮圧されてしまわう。まさに七〇年代中期こそ革命と反革命の激突の時代、激動の時代に他ならない。

今月の内容

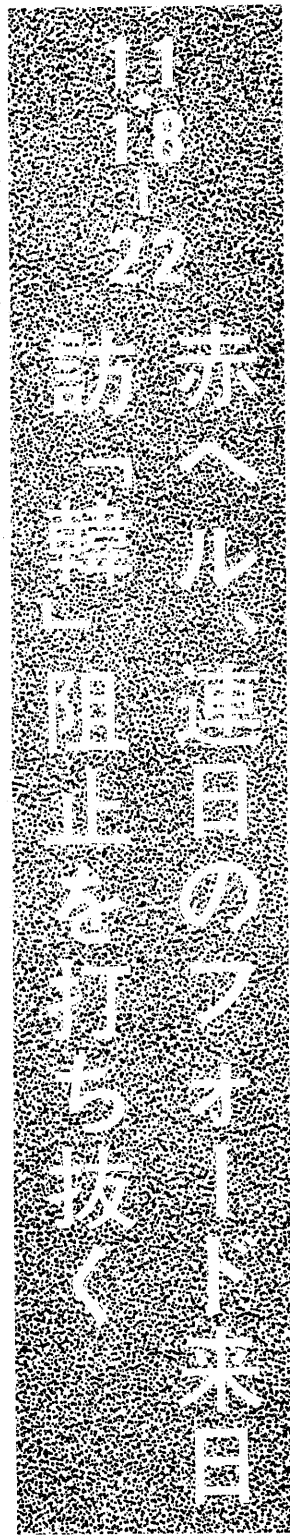
12・7、戦旗派大政治集会に総結集せよ！	二頁
フオード来日、訪「韓」阻止闘争	三頁
日帝一寺尾の差別・死刑判決を許すな！	四頁
10・21沖繩現地中軸に各地で決起！	五頁
海洋博粉砕現闘団建設	五頁
現代過渡期世界論の深化とカクマル主義者との訣別	八頁
帝国主義世界再分割戦、日帝の国家形態のボナパルト的転換について	十六頁

戦 旗

十・三一狭山闘争でわれわれは一敗地にまみれた。だが戦闘的部落青年をはじめ全労働者・人民はその敗北を真に教訓化し、今雄々しく立ち上がり、これまで以上の怒りを敵国家権力にたたきつけんとしている。

朝鮮人民の反朴一反日帝闘争は永続的な昂揚を見せ、「韓」国支配階級の内部対立一崩壊の危機をつくり出している。

今、日帝田中政府は崩壊し、日



帝ブルジョアジーの焦燥は更につのらんとしていた。この危機を座して黙視するのか、それとも階級の激動の突破口にするのか、われわれの進むべき道はあまりに明白である。

七五年は既に目前である。この七五年こそ、われわれの戦略的反攻の時でないならばならない。七二年「返還」以降の決算として沖繩海洋博の開催が目論まれ、三里塚空港の開港が目論まれている。プ

絶望と戦争への道

彼らのどす黒き野望は、虚飾に色どられた日米共同声明を見れば一目瞭然であり、彼らが様々に語るその言葉の端々に、彼らの絶望性と、そしてあくなき植民地化の野望、戦争の野望がうかがいられる。「現在の世界的な経済困難にかんがみ。」「経済及び金融上の危機を事前に回避し。」等々、散々語ってきた資本主義の繁栄は最早終りをつけ、彼ら自身が語る危機の時代への突入が誰の目にも明らかなのだ。イギリス、イタリアのマイナス成長率20%台への転落は衆知の事実であり、米帝にあっては失業率の6%台への上昇、そして日帝は成長率が0%になった。資本主義の破産は、帝国主義の死滅への加速度的進行は、最早誰も押しとどめることは出来ない。

しかるに支配者共は、自己の飽くなき野望と、そして延命の為人民からの徹底収奪、差別と分断、他民族抑圧、植民地支配を強行せんとしている。「最もかわりのある当事者間での諸懸案の平和的な解決を容易にし、国際緊張を緩和し、開発途上国の持続的、かつ秩序ある成長をうながし、また、同地域の諸国間の建設的な関係を助長するような条件の醸成を引き続き促進する。」「農業の分野での開発途上国に対する援助を強化し。」等々朝鮮の南北分断政策の徹底強化、固定化や、あるいは自らが破壊してきたアジア諸国の農業を引き続き破壊せんとする事

を公言し、戦争政策の継続、日帝の侵略反革命戦争の本格的遂行を謳いあげたのだ。しかもベトナムを始めたインドシナ諸国での革命の最後の段階、あるいは朝鮮人民の日帝、朴の全体重をかけた攻撃への反撃と死闘に対し、これを徹底弾圧し、抑圧し、封殺せんと日米安保の核を基軸とした強化、横須賀、横田、佐世保等のアジアの軍事拠点としての維持と強化沖繩の日、米共同軍事基地化の強行をなさんとしていたのだ。

ルジョアジーの意図は明白である。この七五年をメドに何としても侵略反革命体制の構築をなさんとす日帝を全人民の力で徹底的に追いつめなければならぬ。今秋二期大決戦四つの任務を貫徹したその成果を徹底的に打ち固め、七〇年代中期攻撃的階級激突戦を切り開かなければならない。全ての同志諸君は十二・七共産同(戦旗派)政治集会にもてる全ての力量を投入し、七〇年代中期階級激突戦の最先頭に立たなければならぬ。

全ての同志・友人の皆さん! われわれの任務は既に明らかである。全戦線・全領域の全ての力を十二・七共産同(戦旗派)政治集会に結集せしめ、七〇年代中期階級激突戦を切り開く決意と態勢を打ち固めようではないか。

18-22、連日の激闘

かかる虚飾の日、米共同声明の発表と「韓」国への訪問をおよそあらゆる手段と策謀をもってなさんとした日、米支配者共に果敢な闘いをいどんだわが蜂起・プロ独派は18日、羽田現地に勇躍登り上りフォードの来日をむかえうった。権力の決死的攻撃は自らの延命に向け、全体重をかけた弾圧をひき、全国から20万にも及ぶ警察権力、憎むべき機動隊を動員し、徹底的な検問と、羽田、東京の戒厳令体制でなんとか闘いを封殺せんとした。

フォードの来日を阻止すべく弾固としたデモへと出発せんとしたその時、権力はわれわれの闘いの決意に恐怖し、公園への封じ込めを策し機動隊の包囲網を敷いたのだ。かかる反革命の全体重をかけた暴挙に、われわれは一切ひるむ事なく、機動隊の三重・四重の壁に一大突撃戦を貫行した。次々と増強された権力の壁に果敢に挑み遂にそれを突破したのだ。そしてわれわれは羽田へ羽田へと進撃し、権力のテロや、リンチをもともせずに闘いぬき切った。しかし残念ながらフォードの来日を許してしまつたわれわれはただちに首都を人民の決起の場とすべく、再度の権力の包囲を突破し、途中三里塚現闘から逃亡した日向脱走分子に一撃を加え、礪川公園で首都で闘いぬいた部隊と合流し、蜂起・プロ独派百五十の単独集会をうちぬいた。

かかる蜂起・プロ独派の弾固とした闘い、将に組織された暴力と国際主義で武装した闘いの一方社・共人民戦線が、愛国主義、民族排外主義を全面化させ、フォードの来日、訪「韓」を核に切り縮め朝鮮人民の決起と連帯し切れず、あるいはカクマルがその尻尾にしがみつぎ、そして革命派と、人民戦線の間を浮動する四トロ、プロ青、日向等の中間主義者どもが行き場を失い大連合をなしていくという無様な姿をさらけ出した。四トロの如きは社・公・共集会へのもぐり込み路線、人民戦線への純化が失敗しながら右往左往をくりかえし、プロ青、日向弱小プロックがそのまた尻尾にくっつくという、その事の次第が右派大連合なのだ。闘うアジア人民、被抑圧民族、人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦に転化するの否か、70年代中期戦略的反抗に向け三大政策四つの任務を全うするの否か日本革命の成否はこのことの如何にかかっている。人民戦線は如何に及ばず、フォードの来日、訪「韓」に対し、日、米、朴の南北分断、固定化策動、植民地化攻撃に抗し決起する朝鮮人民の闘いと連帯すら語る事が出来ない、右派プロックの中間主義的動揺を踏みこえ、蜂起・内戦II世界革命戦争に向って蜂起、プロ独派、全人民は70年代革命の大道を爆進せよ!

集会においては7・7連絡協や、「全国委員会」系の諸君の無方針さ、最大限綱領主義を尻目に、わが蜂起・プロ独派より(首都)北部朝鮮史研、日本反帝戦線が、帝部朝鮮史研、日本反帝戦線が、帝部朝鮮史研、日本反帝戦線の全体重をかけた弾圧をひき、全国から20万にも及ぶ警察権力、憎むべき機動隊を動員し、徹底的な検問と、羽田、東京の戒厳令体制でなんとか闘いを封殺せんとした。

指揮団からの現地報告、反帝戦線、北部朝鮮史研、労共闘から次々と決意表明をうけ、四機の部隊全員のテロ・リンチをはねかえし肉弾戦を闘いぬいたのだ。権力のテロにより多くの闘う仲間が負傷したが、ただちに部隊を編成し、訪「韓」阻止に向け京都、大阪へと出発し、(全国委)、日学戦の諸君と共に、21日、22日と関西での闘争をぶちぬいた。21

日都ホテル包囲闘争、22日伊丹空港攻撃と将に首都、関西をつらぬく闘いを貫行したのだ。

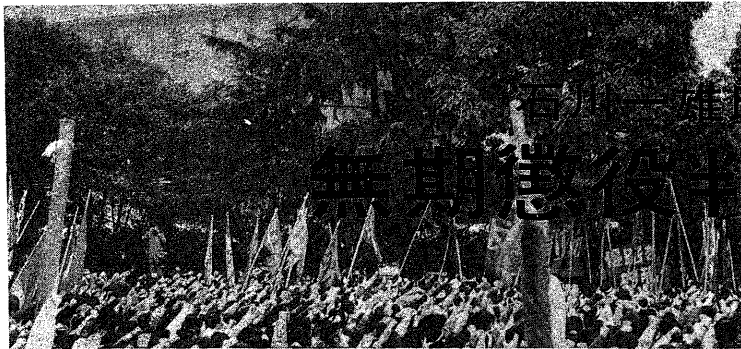
新たな激動を闘いとれ

かかる蜂起・プロ独派の弾固とした闘い、将に組織された暴力と国際主義で武装した闘いの一方社・共人民戦線が、愛国主義、民族排外主義を全面化させ、フォードの来日、訪「韓」を核に切り縮め朝鮮人民の決起と連帯し切れず、あるいはカクマルがその尻尾にしがみつぎ、そして革命派と、人民戦線の間を浮動する四トロ、プロ青、日向等の中間主義者どもが行き場を失い大連合をなしていくという無様な姿をさらけ出した。四トロの如きは社・公・共集会へのもぐり込み路線、人民戦線への純化が失敗しながら右往左往をくりかえし、プロ青、日向弱小プロックがそのまた尻尾にくっつくという、その事の次第が右派大連合なのだ。闘うアジア人民、被抑圧民族、人民と連帯し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級激突戦に転化するの否か、70年代中期戦略的反抗に向け三大政策四つの任務を全うするの否か日本革命の成否はこのことの如何にかかっている。人民戦線は如何に及ばず、フォードの来日、訪「韓」に対し、日、米、朴の南北分断、固定化策動、植民地化攻撃に抗し決起する朝鮮人民の闘いと連帯すら語る事が出来ない、右派プロックの中間主義的動揺を踏みこえ、蜂起・内戦II世界革命戦争に向って蜂起、プロ独派、全人民は70年代革命の大道を爆進せよ!

*

*

*



氏に対する

判決=差別・死刑攻撃を糾弾せよ!

1031狭山公判闘争

10月31日、日帝・寺尾は無実の部落青年石川一雄氏に対し、「無期懲役」判決(差別・死刑攻撃)をうち出した。の攻撃はいうまでもなく、部落解放同盟を中軸とした前進する闘山勢力への「恐怖」であり、全人民への日帝の体制的延命をかけた「絶望的挑戦」である。一刻の裕余も一瞬のためらいを排し「糾弾・奪還」をより鮮明にさせ、総攻撃を開始しなければならない。

日帝・寺尾の暴挙許すな

10月31日、日比谷小公園を中心、部落解放同盟を中軸に3万余が結集した。日帝寺尾は、全関東の機動隊の総力をもって警戒体制をしく中で、「無期懲役」判決を下した。この日、日帝寺尾を先兵とした国家権力は、高裁をとりまく狭山勢力の動向に反革命的恐怖を露骨にした。「判決」が下るや、公判廷(日比谷公園)には、怒りの糾弾が轟きわたり、敵権力機動隊はカラッポにされた高裁の防衛体制と小公園の狭山勢力への反革命的弾圧体制をしいたのである。

すぐ様、明治公園に向けた抗議のデモを強力に展開した。

われわれはまず第一に、無実の石川青年家族と全国の部落大衆の「無期懲役」判決に対する憤りと何よりも石川青年の無念さを痛苦に把えかえし、自己の闘いの不十分性を克服しきり、必らずや、石川青年を生きて奪還する決意をより強固に固めねばならない。

第二に、日帝、寺尾の「無期懲役」判決は、その目的と性格を次の内容としていることを正確に把えかえしておかねばならない。すなわちこの攻撃こそは、①一審差別判決を上まわる一層の差別性と反革命性に貫かれていことである。

「石川青年の無実の主張は、命が欲しいからだ。」「自白と客観的事実との矛盾は問題ではない。」「別件逮捕は正当である」という断じて許すことのできないもので貫かれてい。部落差別にもとづく権力の差別犯罪であること、一切の部落差別問題については何ら言及せず反動的・反革命的居直りでもって貫かれており、まさしく差別・死刑攻撃そのものとしてある。②同時にこの攻撃は、「無期懲役」判決という形態をもって、所謂、融和攻撃としての性格を示しながら、差別者集団「日共」の「石川ク口説にもとづく情状酌量論」を逆手にとり、一層、差別者集団として敵対を深めさせ、狭山勢力の戦列内部に分断と亀裂を持ち込めんとする狙いを有していることである。③そして、日帝、国家権力は、機動隊、政治警察を基軸とした予防反革命的弾圧体制をしき、国家機構(行政・司法・立法)の全領域にわたって全力をか

けた巻返しに転じたことである。

第三に、かかる攻撃を総力をかけて開始したことの階級的意義を、われわれはしっかりと踏まえておかねばならない。それは①日帝は、戦後世界体制の崩壊の危機と三ブロック階級闘争の「革命と反革命」の激突と革命勢力の前進に規定されると同時に、米帝、西独帝など帝国主義間対立を深めながら増々自己の侵略帝国主義としての絶望的本性を露骨にせざるを得ず、その体制的危機を朝鮮侵略反革命的危機として決定的に深めていることであり、②侵略反革命の本格的遂行に向けて、侵略反革命体制の打ち固め(統治形態の暴力的反動的転換を開始し、全面的政治反動を遂行しつつあることであり、③部落差別・人民分断攻撃と対決し

10・30 戦闘的部落青年先頭に 10・31 赤ヘル二百余で集会貫徹

10・31 狭山決戦を前に、戦闘的革命的部落青年・労働者を最先頭ににして全国の赤ヘル蜂起(プロ独派)は総決集した。集会場にあてた墨田区民会館は真紅の旗と赤ヘルでうめ尽され「10・31 死刑判決絶対阻止! 日帝・寺尾決死糾弾! 無実の石川青年実力奪還!」の熱いシュプレヒコールでつつまれたのである。

集会は、全国労共闘の水野議長の基調提起をもって開始された。その中で、第一に、狭山9月決戦19・26 攻防から10・31 を巡る情勢について、①日比谷公園を揺がした12万余の全人民的決起とそれを背景とした石川青年の日帝・寺尾糾弾の「意見陳述」の勝利的貫徹、②10・3 論告公判の破綻を暴露しながらも10分間の差別検事論告(足跡石膏廃棄の正当化と一審差別論告の全面踏襲)の反動的居直り、それを反革命的に防衛し、「10・31 判決」を宣言した日帝・寺尾の差別性、反動性、反革命性、

③ 狭山闘争が全人民的普遍的な性格をもって発展すればするほど差別者集団「日共」カクマルは、「狭山は終わった」なる武装解除と敵前逃亡を側面から促進しながら差別敵対を拡大している。と明らかにされ、第二に、かかる中での主体

て飛躍的に成長する狭山勢力の革命的内乱勢力としての発展転化への反革命的恐怖をこそ、今、日帝・寺尾を先兵として「絶望的挑戦」をしかけて来たことである。

第四に、そうであればこそ、狭山差別裁判糾弾闘争は、一切の差別分断、融和攻撃粉砕! 部落完全解放! 日帝打倒の戦略的水路をこじあけるか否かの決定的革命的試練を課せられているのである。差別者集団「日共」、カクマルは言うに及ばず、あらゆる敗北主義、清算主義、日和見主義がこの試練から群れをなして逃亡することを決して許さず、断断固として戦闘態勢を強固にうち固め、狭山闘争の永続的武装的發展を勝ちとらねばならない。

的任務は、①「無実・差別」をより系統的に暴露し、②「糾弾・奪還」「打倒・決戦勝利」を主力闘争をもって実現しきること。③ 深まる差別者集団の敵対を粉砕し、同時に狭山勢力内部での「衆観論」を克服しつつ、大胆に武装した赤ル部隊の登場をもって闘いぬくこと、として鮮明に提起された。

つづいて集会は、蜂起プロ独派に結集する革命的戦闘的部落青年・労働者から、満腔の怒をこめた日帝・寺尾決死糾弾! 石川青年実力奪還! の方向性とそのことの緊急性重大性を鮮明に提起され、同時に今や日常的に拡大深化される部落差別を糾弾し、解体的危機に類する部落産業(皮革・食肉等)を徹底的に防衛する闘いが勝利的に実現されていく事と狭山闘争の勝利は決して切り離す事はできないと鋭く提起された。すべての同志は、この提起を真に自己のものとして闘う事を徹底的に胆に銘じた。

集会は、山口大学全学共闘の同志と北九州労働者部落解放研の代表から熱烈な決意表明を受け、そして10・21/27 沖繩現地連統闘争を貫徹した同志から緊急闘争報告をも同時に勝ち取り、すべての同志は、10・31 決戦を断固として最先頭で闘いぬく強固な意志一致をもち、集会を終えた。

沖繩現闘団建設テコに各地で闘い

10・21〜27連続闘争貫徹……沖繩 狸穴公園に二百五十……東京

今秋期10/21闘争はわが蜂起・プロ独派を先頭とするプロレタリア人民諸階層の巨大な結集をもって圧倒的に勝ちとられた。

東京においては狸穴公園に二百五十余名の革命的労働人民を結集し九州においては天神公園に六百余名の結集をなし、更に沖繩においては革命的独自潮派五十余の闘いが実現された。

東京における闘いは「今秋期二大決戦・四つの任務」を担う蜂起・プロ独派を牽引軸に、のろし派・どう派の結集として勝ちとられた。

集会は実行委を代表して西田氏より挨拶を受け発言に入る。北部朝鮮史研より発言。更に三里塚空港反対同盟北原事務局長の挨拶を受ける。北原事務局局長は「10/10三里塚現地集會を勝ちとったわれわれは、政府・公団の攻撃を最後の粉砕する確信を増々深めていく。敵の鉄塔破壊攻撃の際には諸君らは断固として武装し現地にかけつけてもらいたい」と発言し全集會参加者の圧倒的拍手と「意義なし」で確認されたのである。

最後に7・7協・反帝戦線全国委の発言のあと日本反帝戦線を代表して菊池同志が発言に立った。そして「本日の集會の第一の意義は70年代戦略的反攻に向けた革命勢力統合の第一歩を作り出したことであり第二には四トロ・プロ青マル青等の清算主義、経済主義がはびこる階級闘争の否定的現実を革命的に突破する方向を獲得したことである」とし「わが日本反帝戦線・蜂起・プロ独派は二大決戦四つの任務を遂行し羽田現地でフォード来日阻止を闘い抜く」と闘いの方向をさし示した。

そしてデモに入った。新たな革命勢力統合の胎動に恐怖した権力は圧倒的な機動隊、私服公安を配し弾圧に臨んで来たが、これを粉砕して闘いは最後まで貫徹された。この10/21闘争を通じて①沖繩解放闘争の前進・沖繩解放同盟(準)との連帯の闘いに対する限界の徹底した自己批判をなさなければならぬ。これは7・7協の諸君の大大和排外主義的傾向との闘いの不十分性として把えかえされねばならない。

九州においては21日昼まず九大教養において蜂起・プロ独派独自

集会としての「海洋博粉砕実行委結集集會」が勝ちとられた。この集會は75年海洋博をもって、沖繩反革命統合を完成しアジア侵略反革命を遂行せんとする日帝の攻撃に対決する陣型を作り出したものとして存在している。集會は全九州反帝戦線代表、永田同志の「一切の沖繩終焉論者を粉砕し、血債にかけて沖繩海洋博粉砕、5・15侵略反革命体制爆砕に進撃しよう」という決意表明を中心に熱っぽく勝ちとられた。

その後、解放派、プロ青との共同集會に蜂起・プロ独派の圧倒的独自隊列で参加し経済主義者、プロ青等を寄せつけず、75年海洋博粉砕・朝鮮植民地化攻撃阻止の旗印を鮮明にして闘い抜いた。

沖繩においては75年海洋博粉砕に決起した戦闘的沖繩人民を中心とした海洋博実行委によって連続的に闘いが貫徹された。21日は奥武山における、原水協主催の集會に革命的に介入し海洋博粉砕・CTS粉砕・沖繩解放をかかげて闘う労働者人民へ情宣を貫徹した。24日備瀬から大浜までの海洋博粉砕の独自闘争を実現、26日本部町大浜埋立地における青年協による海洋博粉砕闘争に革命的に介入、そして、27日においては大城昌夫氏を招いて、海洋博粉砕の講演をかちとり、現地の闘う農漁民と連帯して現地における現闘団決集集會を実現した。

又、この闘いを積極的に担うと同時に独自活動を強める沖繩解放同盟(準)を先頭とする海洋博粉砕沖繩一「本土」実行委は山川・石川・浦崎・浜元・渡久地・名護大浜と本部半島のいたるところに海洋博粉砕のステッカーを張りめぐらし、現地に

ぐらし、現地における闘いを実現したのである。そして、この闘いの過程で沖繩一「本土」実行委は75年沖繩海洋博を射程に現地本部における統一現闘団建設をかちとった。

わが日本反帝戦線もその一翼として断固たる現闘建設をなしとげたのである。君!! 兄弟達!! (本部現地に決起した青年労働者)



(本部現地に決起した青年労働者)

われわれがこの東京九州沖繩を貫く10/21闘争の勝利の貫徹の中で獲得した内実は多大である。それは第一に70年代安保決戦・沖繩闘争の中で分裂し混迷している旧八派そのものを、70年代革命勢力の基準の下に統合する闘いが、われわれによって開始されその端緒が実現されたことである。第二に沖繩解放同盟(準)の闘いを受けとめきり、75年海洋博粉砕・15侵略反革命体制爆砕・沖繩解放を「本土」労働者人民の側から闘い抜く陣型を作り出したことである。

今日の日本帝国主義の侵略反革命、朝鮮植民地化攻撃に対決し、国内差別、人民分断攻撃、帝国主義的労働運動強化を粉砕し、プロレタリア国際主義と組織された暴力によって自己を打ち鍛え、帝国主義の統治形態のポナバルティズムの転換をも射程に入れた反革命的暴力的独裁体制を粉砕していかなければならない。

九州海洋博粉砕へ 九実行委(準)の建設かちとる

全国の戦闘的な同志諸君! 目前に迫った沖繩海洋博粉砕に向けて全九州一山口の革命潮流は、沖繩現地と連帯して唯一10・21を闘い抜き、沖繩現地派遣団を含めて着々と戦闘体制を固めていることを報告する。

九州各地、山口の革命的同志は

今年4・26・28沖繩講演集會・沖繩闘争、5・15闘争、7・20海洋博粉砕現地闘争を闘い抜いてきた。10/21九大教養部に結集した全九州一山口実行委(準)の隊列は、日共・民青の敵対・学内介入を粉砕し、断乎とした集會を獲ち取った。海洋博粉砕に向けて長崎から

結集した沖問研の同志は、①長崎の地において戦闘的沖繩青年を中心に海洋博粉砕・沖繩解放の闘いを実現していること②沖繩は「返還」の過程を通して日帝の支配がいよいよ強化され、沖繩振興開発計画の中で、沖繩人民は生活を破壊され、命をおびやかされる

10・10 三里塚現地に五千名決起

から闘いに決起していること③アジアにおける反革命の集中環として沖繩が位置していること④祖国復帰運動の限界を突破し、沖繩解放—安保粉碎—日帝打倒の一大高揚をかちとらなければならないことを熱烈に訴えた。九州における沖繩青年の断乎たる決意に満場「意義ナシ」と拍手で応え、続いて各地区の同志からの決意表明が行われた。とりわけ、海洋博粉碎、全九州—山口実行委(準)を代表し沖繩現地における最前戦基地を構築するために向わんとする現闘からの決意表明は熱い連帯をもって確認された。最後に反帝戦線の同志から、①フォード来日、訪「韓」をもってする米—日「韓反

革命反盟の強化、日帝の侵略反革命、朝鮮植民地化の中で、沖繩の日帝による反革命的統合とアジア反革命軍事同盟の中心環として沖繩に対する攻撃が強化されていること②これに対し、社共・カクマル・マル青は「沖繩闘争終焉論」をもって逃亡を開始し、社会排外主義への純化を深めている。また中核派は大和排外主義に転落し、自決支持諸潮流においても口先きだけの「国際主義」、分離主義が生み出されている③我々は、社会排外主義、大和排外主義、「沖繩闘争終焉論」を粉碎し、海洋博粉碎—沖繩解放闘争の大爆発をかちとらなければならない。60年代—70年代前半における日本階級闘争

の地平をはっきりと受けつぎ70年代中期戦略的反攻を戦取しなればならないことが提起され全員の拍手でもって固く確認されたのである。集会は更に九大全学の学友諸君とともに、10・31狭山決戦勝利、フォード来日訪「韓」阻止総決起集会として再開された。ここにおいても、海洋博粉碎、全九州—山口実行委(準)は、沖繩闘争から逃亡した「朝鮮連帯」が全く欺瞞的なものでしかなく、口先きだけの「国際主義」であることを訴え、海洋博粉碎闘争への決起を呼びかけたのである。デモは10・31狭山決戦勝利、フォード来日訪「韓」阻止と、海洋博粉碎—沖繩解放の

旗を先頭に出発した。秋期闘争の高揚に向けて編成替えをした福岡県警がテロ、リンチをもっておそいかかってきたけれども、我が赤ヘルはこれを断乎として粉碎し、敢然たるデモを貫徹したことは言うまでもない。警護公園において再度学総決起集会ののち、米領までのデモを貫徹したのである。全国の同志諸君!全九州—山口の蜂起—プロ独潮流は、沖繩現地と固く連帯し、海洋博粉碎の一大高揚をかちとるべく着々と戦闘体制を固めている。必ずや一大決起をかちとろうではないか。

九日 反対同盟と討論集会 十日 機動隊の阻止線突破

今秋期、二大決戦、四つの任務(狭山—三里塚—朝鮮—沖繩)を戦略的課題として掲げきり、70年代中期の戦略的反攻戦を昼夜をわかつた、戦い抜いている全国の同志諸君!プロレタリア人民・学生の皆さん!

九月、部落解放同盟と固く連帯し、狭山決戦の死闘を勝利的に貫徹している成果の上に立って、今秋期の一大メルクマールとして位置している十・十三里塚空港粉碎全国総決起集会への連帯的決起を通して、岩山大鉄塔死守、第三次強制収用阻止決戦の戦端を三里塚・芝山連合空港反対同盟との固い連帯のうちに切り開いた事を報告する。

十・十集会は、反対同盟を中心にそれと連帯する全国から結集した五千余に及ぶ労・農・学の強固な隊列のうちに克ち取られた。

反帝戦線行動隊を中軸とした蜂起プロ独派二百余名の隊列は九日十日に亘る岩山大鉄塔を中心とした産土参道防衛戦・大袋機動隊撃破の体系的展開を通して、三里塚闘争の武装的発展の地平を断固防衛しきり、侵略反革命の拠点三里塚空港粉碎のローガンの下、岩山大鉄塔死守戦の戦略的地平を全人民の前に明らかにし、反対同盟との連帯をより一層強固に打ち固めた。

反対同盟の九年間に及ぶ一貫した実力闘争の展開、とりわけ、九・一六東峰十字路武装遊撃戦闘に於て辛酸をなめさせられた国家権力—敵政府公団は、七四年に入り、破産した公団総裁今井に替え大塚

新体制をもって開港策動を一挙的、暴力的に飛躍させてきている。三月農振法攻撃、七月農業委員会での強行採決、阻止行動に決起した青年隊、支援学生二名の逮捕と国家権力—機動隊を前面に押し出した形での一連の反対同盟圧殺策動を背景に、鉄塔撤去用道路を大鉄塔から五百メートルの所迄建設するという暴挙を行なってきた。

敵政府公団のかかる攻撃に抗して、岩山大鉄塔、第三次強制収用地区を巡る三—九月闘争の連続した闘いを経る中で、反対同盟とそれに連帯する労・農・学は戦闘体制を打ち固め、大塚路線との革命的対を実現してきた。

十・十集会は、かかる情勢の緊急性、緊迫性の中で闘い抜かれ、三—九月闘争の革命的対峙の地平を革命的労・農・学五千余の結集と共に第三次強制収用阻止闘争へ向けた総反攻へと押し上げ、その戦術的環としてある大鉄塔死守戦闘への戦端を切り開いたのである。

敵の敵戒体制を突破した反帝戦線行動隊は、九日、夕やみをつい



(現地に決起した五千余)

て大鉄塔のそびえ立つ岩山の地に登場し、鉄塔死守戦の決意も固く戦闘的デモンストレーションをもって岩山反対同盟との固い連帯のうちに岩山地区を赤ヘルの完全な制圧下に置いたのである。続いて赤ヘル部隊は反対同盟の熱い援助の下岩山公民館を出撃拠点として打ち固め、反対同盟から救対部長秋葉哲さんを迎え、三里塚農民の闘いの歴史を学ぶと共に鉄塔死守戦に向けた真剣な討論を克ち取っていった。

翌十日、朝もやの中岩山公民館を立った行動隊は鉄塔撤去用道路を目前ににらみつつ岩沢老人行動

隊長を迎え、鉄塔前集会を打ち取り、十・十集会へのより強固な意志を打ち固めたのである。

秋葉救対部長、岩沢老人行動隊長の「九・一六闘争を上回る大会戦を組織し、鉄塔を死守してこそ、三里塚闘争の勝利はある」という

両氏の力強い発言の中に路線的確信を強固にした反帝戦線は更に労働部隊との合流を打ち取った。二百余名にふくれ上った蜂起プロ独派の強固な隊列は、行動隊を先頭に産土参道の防衛戦をもつて、戦闘の火蓋を切って落した。

この日、十・十集会を完全に圧殺し去らんと、数百台の装甲車、放水車を動員して弾圧に臨んだ国家権力機動隊は、鉄塔破壊用道路の先端に位置する産土参道への一糸乱れぬ蜂起プロ独派の進撃の前になす術もなく、既にその野望を完全に打ち砕かれたのである。

蜂起プロ独派の真紅のうねりは九日・十日早朝にかけての攻防戦の戦果をもって、五千余の労働・農学の待つ三里塚第二公園にその姿を登場させた。

集会は兄弟同盟の高浜入千拓反対同盟、関西新空港反対同盟、パイプラインと闘う諸戦線等の結集のうちに、戸村一作反対同盟委員長の挨拶をもって開始された。北原事務局長の基調提案、青年行動

隊、老人行動隊、婦人行動隊と続く決意表明のうちに、第三次強制収用阻止戦に向けた並々ならぬ決意と不滅の三里塚魂をはっきりと見てとることができた。

集会の後、北総の台地を揺がす一大デモンストレーションへと移行したのである。岩山大鉄塔から空港に及び延々六キロに亘る労働・学五千の隊列は、三里塚の地を完全に席捲しきったのである。

デモンストレーションが大袋へ至る中で、蜂起プロ独派の突出した闘いによって、野望を打ち砕かれた国家権力機動隊は、なんとかその失地を回復せんと我が労働部隊に襲いかかったのである。

なす術もなく茫然と立ちすくむ中間諸潮流をしりぬに、反帝戦線行動隊は時を得たりと直ちに槍を構え、襲いかかる機動隊の大楯に向けて突撃を繰り返し、後退を重ねる敵の阻止線を完膚なきまでに撃破し抜いたのである。

反帝戦線行動隊の産土参道防衛戦、大袋機動隊撃破の二つの戦闘は、反対同盟のこの日の闘いと共にはっきりと三里塚第三次収用阻止戦への戦端を刻印したのである。

現代過渡期世界の絶望的危機、朝鮮制圧をメルクマールとした日帝の侵略反革命の一挙の拡大、差

別分断支配を中軸とする五・一五侵略反革命体制の一層の排外主義的打ち固め、それと絶対決する社会排外主義、中間主義と徹底して分岐した党と革命勢力の反攻戦の略的前進という階級攻防を背景に、敵政府公団、大塚路線の表現するものは国家権力のポナパルチズム的転換、その反動を暴力の先取り的質を体現するものとして現われてきている。歴史的な三里塚闘争の偉大な成果は現闘活動の中軸とした労働・学・農の固い連帯の下、農地防衛から空港粉砕へと闘いの質を押し上げ、侵略反革命と対決する闘いの全人民的地平を獲得して

九月十八日、反対同盟副委員長木内武さんが心筋梗塞で急逝された。氏は九年間の三里塚闘争の歴史の中にあつて、副委員長としての重責を果し、常に闘いの最先頭で反対同盟の強固な戦闘体制を支え闘い抜いてこられた。

病魔をもとめせず、第一次強制執行阻止闘争に於ける地下壕戦の貫徹、逮捕、第二次強制執行阻止闘争に於ける駒井野城での壮絶な闘いに象徴される氏の闘魂

木内氏の死を悼む

三里塚反対同盟副委員長

は、闘うプロレタリア人民の心をとらえて離さないものである。氏の闘魂を教訓とし、三里塚闘争の絶対勝利を貫いてこそ、氏の遺志にこたえる唯一の道である。

二十日午後一時から告別式が反対同盟を先頭とした闘う労働学の手によって行なわれた。

三里塚の台地に眠る永遠なる氏の闘魂と共に新たな進撃を開始しなければならぬ。

ブル新の「韓」国特集糾弾

キーセン観光を許すな

キーセン観光に反対する女たちの会を中心に、南朝鮮人民の反日・反朴闘争に連帯して闘っている多くの労働者人民は、小雨の中、終始一貫したデモとシュプレヒコールで、毎日、日経、サンケイ新聞社を糾弾し闘い抜いた。各新聞社は入口をガードマンと警察で固め、自らの反動的な姿をあらわにし、しかも権力は、不当にも一名のデモ参加者を拉致し去ったのである。

毎日を皮切りに連続して出された「韓」国特集は、全面的な朴政権の美化と、日本帝国主義の侵略反革命攻撃と南朝鮮人民への抑圧・収奪の意図的な隠蔽に満ちたものである。「公正な報道」などというペールの下で、毎日、日経、サンケイは日帝と一体となり、日本の労働者人民を朝鮮植民地化攻撃・差別排外主義に動員せんとする積極的な宣伝隊の役を買って出ているのだ。

とりわけ、キーセン観光を代表とする、南朝鮮へのきわめて差別的な旅行（日本人のみ格安で優先的、しかも女性の肉体までも提供するサービス）を南朝鮮人民は

強いられている現実を把握せよ！）が、日本の労働者人民の一部にもてはやされ、直接的に南朝鮮人民の前に差別者・抑圧者として立ちあらわれているとき、このような特集は許しがたいものであり、徹底して糾弾・粉砕しなければならぬのである。

民族差別の上のつかかかった、きわめて悪質な女性差別キーセンをもつて報告したい。

五・一三闘争に対する

報復・実刑攻撃を許すな

全国の同志、友人諸君、10月29日、東京地裁一岡垣裁判長は、5・13闘争に対しての反革命的報復として二名の実刑を含む、有罪判決を強行した事を、満コウの怒りをもつて報告したい。

深川順次君に対して一年十ヶ月、永田至君に対して一年四ヶ月の実刑判決。全員の有罪判決は、七二年五・一三闘争を派兵阻止神田武装遊撃戦の革命的意義、とりわけ五・一三闘争が七〇年代階級闘争の武装的発展に向けた歴史的

きた。それは全国の農民運動、地域住民闘争への波及力、糾合力を内包し、かかる闘いの戦略的発展の方向性を示してきたのである。九・一六闘争は三里塚闘争を日本階級闘争の先端攻防へと押し上げた。大塚路線を粉砕し切り、三里塚を革命勢力の拠点として打ち固めるのか？否か？が七〇年代中期戦略的反攻戦の帰趨を決するといつても過言ではない。

この日の闘いを通して蜂起プロ独派は、中間諸潮流との党派闘争を通じて、三里塚闘争の戦略的地平を日本反帝戦線の組織性と闘争性のうちに提起しきったのである。

は、闘うプロレタリア人民の心をとらえて離さないものである。氏の闘魂を教訓とし、三里塚闘争の絶対勝利を貫いてこそ、氏の遺志にこたえる唯一の道である。

二十日午後一時から告別式が反対同盟を先頭とした闘う労働学の手によって行なわれた。

三里塚の台地に眠る永遠なる氏の闘魂と共に新たな進撃を開始しなければならぬ。

まさに血債にかけて反日・反朴闘争に連帯する闘いの内実が問われているのである。

われわれ女性が、帝国主義的抑圧民族、差別、抑圧者内部における女性として南朝鮮の女性と真に連帯する道は、日帝の朝鮮植民地化攻撃に対決し、日帝打倒の闘いを遂行するなかで、具体的にはキーセン買いの男を徹底的に糾弾し、日本の労働者人民の朝鮮人民への差別、抑圧を許さない闘いをなすことから始まるといえるのである。

十一月十五日、東京地裁一岡垣裁判長は中島修君に二年六ヶ月、阿部康君に二年の実刑を含む八人全員に対する有罪攻撃を日大事件の判決としておこなった。我々はこの権力の攻撃・実刑攻撃に対して断固たる反撃を開始しなければならぬ。

十一月十五日

雷雲社

現代過渡期世界論の深化と カクマル主義者との訣別

帝国主義の世界再分割戦と日帝の 国家形態のボナパ的転換について

現代過渡期世界は70年代への突入をもって、戦後世界体制の崩壊の危機と帝国主義の絶望的な世界再分割戦が全面的に開始された時代であることを宣言した。

帝国主義の反革同盟の再編、世界反革命支配体制の危機は60年代を通じ、後進国、植民地支配体制の危機として、更に、対「労働者国家」群の反革命封じ込め体制の分解として発現し、70年代においては、自らのつくり出す世界再分割戦が帝国主義列強内部に未曾有の永続的、国際的な階級的危機を著積し激発させんとしている。

70年代は文字通り、戦争と革命の時代、帝国主義の世界再分割の時代であり、革命と反革命が権力闘争を公然と開始、帝国主義権力、国家（統治）形態が反革命的、暴力的に転換され、上からの「内乱」が公然と全面化し、革命と反革命の一大階級激突戦が不可避に、急速に煮つまざるを得ない。

我々は、かかる時代において、「権力」問題を曖昧にすることが、革命の基本戦略、戦略的総路線の空文句化、革命の原則、革命的戦術の放棄を意味すること、日和見主義―排外主義への転落の第一歩であることを胆に命じておかなければならない。

そのために、我々はまず第一に、共産同七回大会以来、一貫した過渡期世界論（三ブロック・テーゼ）、レーニン帝国主義論を革命的に継承しぬくことを通じ、自らの党的立場と現代過渡期世界論の基本的視座を明らかにし、日向一派に典型的に示される帝国主義論の修正、過渡期世界論の解体、三ブロック・テーゼの清算、カクマル主義への転落とはつきり訣別していくこと、

第二に、ロシア革命を突破口とする過渡期世界の成立とその展開、現代過渡期世界の基本的特徴、国際的階級危機の前期の成熟とその性格を確定すること、

第三に、帝国主義の世界再分割戦の基本的性格とその骨格、更に、そのことが不可避的にもたらさざるを得ない列強間の国際反革命同盟の再編、それと一体化した植民地支配体制の危機の一層の顕在化、各国の権力再編とその性格を明らかにすること、

序章

三ブロック・テーゼ・レーニン帝国主義論を革命的に継承・発展せよ

我々は「カクマル主義者との訣別（序）」において、日向一派に特有な①過渡期世界論のカクマルの解体、②帝国主義論のカクマル的修正、③同盟七回―九回大会三ブロック・テーゼの清算の特徴とその根拠を述べ、そのカクマルの本質、啓蒙主義―改良主義への転落を明らかにした。

まず、過渡期世界論の解体の基本的観点については、第一に、二つのカクマル論に示される論理主義、経済学方法論主義、第二に、その当然の帰結としての体制還元主義、第三に、三つの基軸（共同反革命体制、IMF・GATT体制、「労働者国家」群の登場）論を基礎とする現代過渡期世界論構成の図式的体制間対立論と帝国主義の恣意的結合を唯一の拠りどころとする段階論なき世界経済論、

である。

現代帝国主義論の修正、経済主義的改作については、第一に、カクマルの三段階論に基づく、現実形態論の解明という徹底した方法主義、かかる方法によるレーニン帝国主義論の解体、帝国主義の基本的矛盾の否定として構成され、従って、第二に、帝国主義の世界支配、世界再分割、植民地支配、帝国主義侵略反革命戦争の全面否定に支えられた、共同反革命の悪無限的再編、恣意的結合への解消論であり、中共流に言えば、徹底した帝国主義美化、カクマルの超帝国主義への転落に他ならず、第三に、このように、超帝国主義をもって帝国主義の寄生性・腐朽性を「共同反革命を内から支える」世界腐朽性論として構成し、それへの民族問題の解消と民族解放―革命戦争の社会主義への帰属をめぐる問題への転換という至少化が強調されるといふ全くの経済主義的代物である。

従って、過渡期世界論と帝国主義論の解体・修正の結果が三ブロック・テーゼの清算にいきつくのは当然の事である。

それは、第一に、革命の基本戦略、戦略的総路線を放棄し、国際主義を立場へとすりかえるカクマル的立場主義に立脚している点、第二に、自国帝国主義打倒、帝国主義世界再分割―侵略反革命戦争―植民地化攻撃粉砕を喪失した「共同反革命に反対する」という空文句が帝国主義打倒の任務を被抑圧人民の民族解放―革命戦争にまかせきり、その裏返しとしての空論的賛美とエセ・インテリの小ブル思想を猛省という言辞で粉飾している点、そして、第三に「腐朽性に抗する」云々が帝国主義打倒と切り離された被抑圧人民に対する自決一般の承認、配慮、猛省という国際的社会的運動（エセ・国際主義）・啓蒙運動として実現され、更に又、小ブル中間層の利害の防衛なるものが、帝国主義の政治的攻撃、差別・分断・排外主義攻撃との対決を放棄し実践的にも、三里塚AIEP現闘からの逃亡、沖縄委員会への解体、部落産業防衛の闘いからの召還という事態にその反動的・反人民の本質を見出すことができる、といった代物である。

現在の日向一派の「腐朽性に抗し」「小ブル中間層の防衛」「猛省」という姿こそ、革命の基本戦略、戦略的総路線を放棄した啓蒙運動―改良主義への転落の典型に他ならない。

ひであり帝国主義的差別主義、経済主義的腐敗にどっぷりつかったカクマル主義者、日向一派との最後の結着こそわが戦旗派建設の全人民に対する責任である。

闘うアジア人民と連帯し、日帝の侵略反革命、朝鮮植民地化攻撃、ボナバ反革命攻撃、差別・分断・排外主義攻撃と対決し、攻撃的国内段階激突戦に勝利し、革命的内乱一蜂起・内戦の大道に突き進んでいかねばならない。

レーニン帝国主義論の継承の基本的骨格について

プロレタリア独裁の現代的勝利として17年ロシア革命の成立は、帝国主義の反革命世界支配の一角を喰い破り、革命のめたらした衝激力は過渡期世界の階級闘争に多大のインパクトを与え、植民地従属国、及び帝国主義国内階級対立を不断に激化させ、国際階級闘争の攻勢的局面を決定付けたのである。

この国際的階級諸関係の転換は、レーニンが「帝国主義論」の中で明らかにした金融資本の運動の性格を、その本質において貫きながら帝国主義の究極的矛盾の発現としての世界恐慌又は帝国主義間戦争が、帝国主義国内外に国際的階級闘争の暴発を生み出し、帝国主義の存立そのものがおびやかされるといふ条件の中で帝国主義の反革命支配の構造を変化させたのである。

過渡期世界において帝国主義は、不均等発展―市場再分割―帝国主義間対立の激化という帝国主義の不可避的運動の過程に生み出される腐朽と寄生の深化を条件として帝国主義国内、植民地従属国に形成される階級対立の激化を「労働者国家」の反革命的封じ込めをも含めて粉碎することなくしては帝国主義間戦争を遂行しえない。

現代過渡期世界の特質はレーニン「帝国主義論」の直接的あてはめをもって世界対象化をなしえないのである。我々は現代過渡期世界を対象化するにあたって、レーニン帝国主義論の意義と継承を明らかにしなければならない。

目次

序章 三ブロック・テーゼ、レーニン帝国主義論を革命的に継承・発展せよ

第一章 過渡期世界の歴史的成立と国際階級闘争の攻勢的前進

〔イ〕 過渡期世界の成立と歴史的地平

〔ロ〕 現代過渡期世界の基本的な特徴

第二章 現代過渡期世界の性格と国際階級闘争の形成と成熟

〔イ〕 戦後世界体制の形成と特徴

〔ロ〕 70年代帝国主義世界再分割の基本的な特徴

第三章 70年代帝国主義世界再分割の基本的な特徴

〔イ〕 帝国主義の世界支配とその権力性格

〔ロ〕 日帝の侵略反革命と国家(統治)形態のボナバ的転換

〔イ〕 国家形態のボナバ的転換の根拠と政治的意義

〔ロ〕 ソナバ独裁体制の本質とその階級的性格

〔ハ〕 侵略反革命体制構築とボナバ反革命攻撃

レーニンは「帝国主義論」の中で基本的にヒルファードディングに依拠しつつ、産業資本主義段階と歴史段階を画する支配的資本の蓄積様式として金融資本概念を把握し、金融寡頭制支配を結論付け、帝国主義階級の経済的規定を五つの基本的標式として明らかにした。

帝国主義は金融寡頭制支配が生み出す膨大な資本の過剰化を独自の市場圏の形成を通じて投機的状況のうちに解決せんとする訳であり、金融資本は政治的国家との癒着をもってする帝国主義軍隊を通じた侵略の強行、植民地従属国の政治経済的制圧という他民族抑圧の体制を資本の暴力性の表現として実現するのである。

又、金融寡頭制支配は国内に中小資本、農業を固定的に残留せしめ、植民地従属国からの独占的高利潤とともに、中小資本からの独占的収奪を実現するのである。ここにレーニンのいえる一部の労働貴族(プロレタリア上層)本来のプロレタリア、外国人労働者としてプロレタリアの階層分化を押し進め、金融資本の生み出す超過利潤をもって第二インター指導部に示されたごとく、一部の労働貴族を買収し、労働運動の排外主義化を押し進め、又、国内被抑圧人民に対しては徹底した差別排外主義、人民分断攻撃を加え、政治的に決起する部分へは反動と暴力をもって対抗するのである。帝国主義は排外主義を基軸として労働者階級内部及び被抑圧人民との政治的分断をもち込み反動と暴力をもって階級支配の構造を実現するのである。帝国主義はかかる階級支配の構造に明らかたされるごとく、階級対立を国際的、国内的に深化拡大したのであり、帝国主義段階においては帝国主義の階級危機は国際的に形成されるのである。

レーニンは階級闘争の国際的広がりに注目しつつ、五つの基本的標式に示される帝国主義

第一章 過渡期世界の歴史的成立と国際階級闘争の攻勢的前進

二九年恐慌からブロック化を通じて形成された帝国主義間対立の激化は20―30年代ドイツ、中国革命の前進に端的に示されるごとく、新興帝国主義列強及び植民地従属国にその矛盾を集中させ全世界的に階級闘争を激成した。この革命情勢をめぐる革命と反革命の攻防は過渡期世界における階級関係の一つの典型を示した。

過渡期世界の成立と歴史的地平

その第一の特徴は、ロシアの「擬制的労働者国家」への変質であり、第二の特徴「労働者国家」及び、国内階級闘争を反革命的に封じ込めることを通じてしか市場再分割戦から帝国主義間戦争を強行することができないという構造に規定され、帝国主義は対外膨張の過程を侵略反革命として表現するというところであり、第三の特徴は、この階級闘争の攻勢的局面を前提としつつ市場再分割戦―帝国主義戦争の強行に向け帝国主義は帝国主義国家権力の予防的先行的権力再編―上からの内乱を準備する。

義の経済的規定のみにとどまることなく、帝国主義段階の政治的特質を、a、帝国主義戦争、b、民族植民地問題、c、帝国主義の寄生と腐朽、d、農業、農民問題という政治的契機のうち段階的規定を実現せんとしている。

帝国主義段階を特徴付ける政治的契機の規定、帝国主義国内及び帝国主義植民地の関係における帝国主義の反革命支配―権力規定、抑圧―被抑圧の関係も含めた階級構成を政治経済的に分析し、このことを踏えたと上で帝国主義―植民地における階級闘争の性格を分析し、階級関係の総体的把握返しを実現してゆくものとして整理することが出来る。

レーニンは、以上の把握返しの中から、不均等発展―市場再分割―帝国主義間戦争という帝国主義の不可避的運動の過程に生み出される国際的階級闘争のダイナミズムを描き出し、革命の主体的、客体的条件を明らかにし、帝国主義段階を革命と戦争の時代として結論付けたのである。

我々は帝国主義と「労働者国家」の並存として現象した過渡期世界を対象化する上で、まず金融寡頭制支配―資本過剰化―資本輸出―不均等発展という金融資本の必然的運動過程を基要素として発現するa、帝国主義戦争b、民族・植民地問題c、寄生と腐朽d、農業、農民問題が過渡期世界の階級関係の変化という主體的インパクトに規定されて深化し、変化し、発展したのかを現代帝国主義論のうちに総括し、世界革命という目的意識性に媒介されつつ「労働者国家」の階級的性格の分析も含めて実現するなかで、レーニン主義の継承と発展としての世界革命戦略の対象化に向けた客体的・主体的条件を明らかにしてゆかねばならない。

第四の特徴は、全本位制から管理通貨制の移行に伴う国独資政策の展開を通じた金融寡頭制支配の深化であり、寄生と腐朽の拡大であり、帝国主義間対立の激化に規定された軍事経済化である。

第一に労働者国家の変質を見てゆく。

17年ロシア革命の生み出した衝激が国際階級闘争の未曾有の高揚を生み出してゆく革命情勢の到来の中で、革命ロシアに対する帝国主義の密集した反革命を引き出した。この世界的革命と反革命の攻防の中で第三インターは、世界党形成、世界革命運動への大道を歩み始めた。

情勢は、帝国主義国内階級闘争、植民地従属国階級闘争、労働者国家内階級闘争をも含めて、階級攻防は、この三ブロックを貫いてドラスチックに展開されたのである。

それは、今だ資本制的生産関係の母班を残存せしめる労働者国家が、それを基礎として存在する階級闘争を世界革命に向けた根拠地国家の建設という方向で徹底してプロレタリア独裁を打ち固め、この三ブロックにおける階級闘争の性格を踏えたと上立って過渡期世界の階級関係の攻撃的局面を一國プロ独の勝利から世界プロ独裁に向けて永続的に発展さ

せ、そのこの実現を世界党に指導された三ブロック階級闘争の結合を世界赤軍―世界反帝統一戦線を主体に、押しすすめることをもって統一的に実現しぬく世界革命戦略の物質化を要求していたのである。

にもかかわらず帝国主義の包囲の中で、スターリン指導下のコミンテルンは六回大会「スタ・ブハ綱領」において「一国社会主義建設可能論」、一国革命の総和としての「モザイク革命論」を定式化し、階級闘争を一国の枠へと封じ込め、生産力主義を全面化させ階級対立を拡大、固定化し、官僚体制の打ち固めを通じてそれを封じ込め階級形成の主体的ファクターを算奪し、プロ独国家の「政治的過渡性」を空洞化させ、固定化させ、変質を遂げたのである。

28年「社会ファシズム論」そして35年七回大会、「反ファシズム統一戦線論」人民戦線戦術に至る路線的ジグザグは帝国主義の予防的先行の権力再編を對象化しえず、三〇年代ドイツ革命を流産させ、プロレタリア独裁に向けた権力闘争を否定したのである。

史上第二の市場再分割戦の性格を見てゆく。二九年恐慌を契機として実現された金本位制から管理通貨制への移行は、恐慌が生み出した不況からの過程を管理通貨制の採用を前提に、経済過程への国家の介入―国独資政策の展開を通じて実現せんとした。しかし、かかる把握にとどまるならそれは一面的であり不十分なものでしかない。

大内のごとく国独資政策の採用をもってすでに帝国主義が恐慌を解決したかのごとく描くのは全くの誤りであり、又これに依拠して戦争も恐慌もないあるのはただ体制間の矛盾のみであると帝国主義を美化するカクマルはいわづまがなである。

金融寡頭制支配が生み出す過剰資本は世界市場を媒介とした投機的好況の実現のうちにか本質的な解決を見出すことができないのであり、けっして一国的枠における国独資政策の展開を通じて恐慌の回避などありえないのである。又、二九年恐慌がもたらした原因が帝国主義の不均等発展によるポンド支配の崩壊、金本位制を基軸にした国際金融体制の空洞化から世界市場の縮小に起因していたことを見るならば危機からの脱出過程が世界市場をその資本力、生産力において統一しうる帝国主義の不在を背景にしていたのであり、この過程が恐慌と戦争の危機を内包しながら国独資政策の展開をもって益々不均等発展を激化させブロック化へ至ったのは必然の過程だったのである。この時代における管理通貨制の採用の現実的過程は、帝国主義間の不均等発展をより拡大しブロック化として帝国主義間対立が政治的に顕在化し、統制経済―経済の軍事化をもつてする侵略反革命の貫徹を通じて始めて帝国主義は不況からの脱出を実現できたのである。

この時代の国独資政策を評価するならば世界市場の収縮という事態を背景に経済過程への国家の介入をバネとしたより一層の金融寡頭制支配の深化であり、帝国主義が本質的に孕む矛盾の爆発としての恐慌を侵略反革命の

遂行ブロック化と経済の軍事化―軍事スペンディングの一体的遂行を通じて回避し、帝国主義間戦争へとそれを転化したのである。それは国際階級闘争を帝国主義戦争の前段で粉砕し実現された戦争政策であったのである。そして、同時にプロレタリア被抑圧人民への矛盾の転化、帝国主義の寄生性と腐朽の深化と見ておくことができる。

第三に帝国主義間戦争と先行的予防的権力再編―上からの内乱を見てゆく。ブロック化から市場再分割戦へと至る過程は独自の市場圏を持ち合わせぬ新興帝国主義(日、独、伊)に植民地掠奪の激しい衝動を生み出し、矛盾を集中したのである。ヴェルサイユ体制下で帝国主義の発展の展望を持ち合わせぬドイツにとって恐慌による米帝資本の引き上げは決定的な政治的危機を意味し、プロレタリアの階級闘争を激成したのである。

日帝にあっては中国革命の前進、朝鮮独立反日運動の爆発に縫着する。かかる国内国際階級闘争をインパクトに侵略反革命の遂行を金融資本が小ブルの自己権力運動をも、反共民族排外主義のうち包摂し法的諸機関の解体、帝国主義軍隊を基軸にした権力形態、軍国主義としてファシズムの登場があったのである。

この過程に見られるごとく帝国主義は過渡期世界の階級関係の転換という制約の中で「労働者国家」の反革命的封じ込めを射呈に入れ、金融寡頭制支配のもと膨大な過剰資本の処理に向けた対外膨張の過程を侵略反革命として統一的に実現するのである。同時に侵略反革命の強行を国内階級闘争の粉砕に向けた侵略反革命体制構築、予防的先行的権力再編―上からの内乱として準備するのである。

現代過渡期世界の基本的特徴

現代過渡期世界は第一期の過渡期世界の特質を基本的に継続しながらも、米帝の圧倒的な力量に支えられ、国際反革命同盟の形成、IMF―GATT体制として帝国主義世界体制が形成され、第一期の帝国主義反革命世界支配をより体系化し、国際反革命同盟に媒介されながら侵略反革命を貫徹したのである。それは恒常的侵略反革命戦争としてある。

戦後帝国主義世界体制の確立は帝国主義の危機をその極限まで引き延ばし、腐朽と寄生を爛熟させ、植民地従属国人民に矛盾を集中した。70年代を画した米帝の政治的軍事的、

第二章

現代過渡期世界の性格と国際的階級危機の前期的成熟

コミンテルン六―七回大会を通じた変質と三〇年代ヨーロッパを席捲した階級闘争の爆発が帝国主義の予防的先行的権力再編―上からの内乱に粉砕されることを通じて、17年ロシア革命と第三インターの成立をもって始まった世界党形成―世界革命運動が最終的に崩壊した。このことによつて、市場再分割―帝国主義強盗戦争を通じて帝国主義は反革命世界支配を再編し、再度の延命を遂げた。

戦後生み出された革命の波は唯一、(東欧)、中国、朝鮮、第一次インドシナ革命の勝利と

経済的世界の一元支配能力の空洞化は、国際的階級危機を一層深化、拡大させ「国際主義」と「暴力」、「自国帝国主義打倒」を公然と掲げる革命派の登場、「労働者国家の政治的分裂、植民地従属国被抑圧人民の闘いの爆発」という事態は世界的階級決戦の前期的成熟として刻印できる。

現代過渡期世界の特徴は第一に、ソ連を中心としたワルシャワ条約機構の確立(それは「労働者国家」の屈服の表現としてもある訳だが)―「労働者国家」の勢力の結集と植民地従属国人民の民族解放闘争の前進を封じ込めるものとして反革命同盟の形成であり、帝国主義は侵略反革命をこの国際反革命同盟に媒介されつつ実現する。

第二は国際階級闘争の攻勢的前進に規定され、過剰資本の処理を恒常的侵略反革命戦争に転化する。不均等発展―市場再分割という帝国主義の運動の必然の過程を階級闘争という主体的インパクトに相乗されることにより拡大させ、にもかかわらず帝国主義間戦争へとそれを転化しえない帝国主義は、国際反革命同盟を巡る覇権の獲得闘争、反革命世界支配の再編として表現する。その究極的過程を帝国主義間対立の激化―世界市場の収縮―侵略反革命戦争政策の帝国主義列強への拡大として表現せざるを得ないということである。

第三に、インドシナ民族解放戦争を頂点とした植民地従属国人民の闘いが帝国主義世界支配の一角を食い破り、階級闘争の再度の攻勢的局面が現出し、他方、それを主体的契機にしつつ、「労働者国家」が政治的分裂を開始はじめたということである。

第四に、帝国主義列強が寄生と腐朽を極限まで押し進め、階級対立を激化させ、そのことを根拠にプロレタリア被抑圧人民の闘いが帝国主義内部へと反映し、国際的な政治的階級分化を自然発生的に形成するということがあり、そのことを根拠に帝国主義は侵略反革命戦争の遂行に向け、ポナパの政治攻撃、ファシズムとして上からの内乱を準備すること。第五に、帝国主義の侵略反革命は植民地従属国に侵略反革命戦争政策を押し付け、反共軍事独裁政権を植民地支配の要として形成する。反共軍事独裁政権はこの矛盾の転化によつて起こされる買弁ブル、大地所有者とプロレタリア、農民との間の政治的亀裂によつて永続的な階級危機にみまわれるということである。

戦後の帝国主義世界体制は圧倒的に政治、軍事、経済力を集中した米帝を中軸として復活を遂げ、米帝の一元的反革命世界支配として現象した。それは米帝を中軸とする恒常的侵略反革命戦争体制として特徴付けられる。米帝は、「労働者国家」群の勢力的結集(ワルシャワ条約機構―コメコン体制の確立)

して、植民地従属国に限定され、米ソを中心とした世界経済体制が冷戦―「平和共存」へと固定化され、戦後革命は再度の流産を遂げた。

と植民地従属国人民の民族解放闘争の武装的発展に規定され、帝国主義列強を国際反革命同盟の下に集約し、「労働者国家」群を反革命的に封じ込め、恒常的侵略反革命戦争を貫行した。

戦後世界体制の形成と特徴

それは、先行的に現代帝国主義として成熟した米帝の圧倒的な生産力基礎が生み出す過剰資本の処理を現代過渡期世界の階級関係の特性に規定されながら、新たなメカニズムのうち実現せんとする政治経済構造の確立としてあったのである。

戦争によって固定資本を解体することなく圧倒的な生産力を蓄積した米帝は膨大な過剰資本の処理を統一的世界市場の再建を通じて、これと有機的な関係を実現しつつもかかわらずそれを解決しえぬ米帝は侵略反革命戦争の遂行へと転化し、自己の産軍複合体を稼働せしめ、新たに生み出される過剰資本の回転のメカニズムを実現せんとした。

かかる構造のうちに形成されたIMF・IAT・T統一世界市場は、不均等発展—帝国主義間対立の激化を背景に二九年恐慌を契機として形成された管理通貨制とは比較にならない程の「安定性」を示したのである。

そしてそれは米帝の侵略反革命戦争の遂行を通じて継続的ドル撤布政策をもって始めて維持しうるものであったのである。

この下で他帝国主義列強は米帝のドルを吸収しながら設備投資主導型経済を国独資政策の展開をもって実現し復活を遂げた。それは恐慌と帝国主義間戦争の危機を極限まで引き延ばし、帝国主義の不朽と寄生を爛熟させたのである。

帝国主義国内階級闘争は戦後革命情勢の中でコミンテルン人民戦線戦術を踏襲したコミンフォルム指導下、帝国主義世界体制の復活に無自覚なまま、帝国主義の侵略反革命に有効に対決しきれず、階級闘争は敗北した。共産党はこの敗北をバネとしてなされたレッド、パーゾー共産党弾圧という帝国主義の攻勢を受けることを通じて大きく後退し、一国主義、議会主義、体制内野党へと純化を遂げたのである。帝国主義は労働運動を分裂させ、社民を育成し、議会制を基調にした支配体制を確立するのである。帝国主義国内階級闘争は社民のヘゲモニーの下に集約され、総体として議会主義への道を突き進み、帝国主義の寄生と腐朽の内に包摂されるのである。

一方、ソ連共産党は、「労働者国家」群をワルシャワ条約機構のうちに集約し、帝国主義との軍事的対抗関係を作り出したが、しかしそれは政治的には「一国社会主義建設可能論」の一層の純化を基礎とした「ソ連防衛」の軍事的表現にすぎない。五六年ソ連共産党二〇回大会でスターリン批判を展開したフルシチョフは、「平和共存」戦略と「過渡期階級闘争消滅論」を明らかにし、益々帝国主義への屈服を体系化し、暴力革命を否定し去り、官僚体制の打ち固めをもって階級矛盾の陰翳を謀った。この路線の下で一切を自国の経済建設の利害へと従属化させ、「ソ連邦の共産主義段階への移行論」なるニセプロパガンダをもって帝国主義との密通を公然化し、同時にコモン体制の強化を通じて東欧諸国

からの収奪の体系を確立したのである。「労働者国家」及び帝国主義国内階級闘争の屈服は朝鮮、ベトナム分裂国家の形成を要とした米帝の侵略反革命戦争政策を容認し、五〇年代反革命世界支配が構造化され、いわゆる相対的「安定」の時代を迎えたのである。

60年代国際的危機の前期的成熟

米帝の一元的イニシアの下に形成された帝国主義世界体制は帝国主義の不均等発展、そしてインドシナ民族解放戦争を頂点とした国際階級闘争の前進という内的、外的要因に突き動かされ、それが孕む構造的矛盾を全面開花させ統一的世界市場を空洞化させ、侵略反革命の激化を生み出し、帝国主義間対立を構造化させ激動の70年代に向けて階級危機を醸成したのである。

現代過渡期世界が六〇年へと推展する中で帝国主義の不均等発展、日帝、独帝(EEC)の伸長、米帝の後退として、帝国主義世界は総体としての力関係の変化を、みながらも、なおかつ米帝は、増大するドル危機の前に基軸国としての物質的根拠を空洞化させながらも米帝の世界戦略、「労働者国家」の封じ込めと植民地従属国への侵略反革命戦争政策を強行することを通じて、ヤルタ分割、ジュネーブ「和平」協定、米ソ「和平」共存の固定化を持続し、米帝の反革命世界支配を維持したのである。

米帝の侵略反革命戦争の継続は国内の産業構造に、軍事関連部門における激しい生産性の上昇と一般部門の再生産設備の老朽化、過剰化という不均等性を固定化させた。かかる再生産構造の不均等性を基礎とした米帝の生産力の停滞はアメリカ資本の海外流出と同時に戦後、新たな再生産設備をもって重化学工業の復活を遂げた日帝、西帝との間での国際競争力の後退をもたらした。

産軍複合体に基礎を置く金融資本とアメリカ政治委員会の癒着をもって展開される、戦時経済とも呼ぶべき軍事スペンディング政策は、一方にアメリカ経済の低成長、低利潤を生み出しながら戦時インフレーションを慢性化するといふアメリカ経済にスタグフレーションを体質化させたのである。

ベトナム人民の永続的な抵抗によってもたらされる戦費の増大は、米帝のこの悪矛盾を拡大し、ドル危機を相乗化し、不均等発展に拍車をかけ、IMF・IAT・T体制は歴史的限界を全面化し、帝国主義列強は史上三度目の世界再分割戦に突入した。

日帝は東南アジア市場で米帝を駆逐し、西欧(西独)帝はEECの形成を通じて米帝との対抗関係を作りだした。

ベトナム民族解放戦争の切り開いた階級闘争の攻勢的發展に規定され、帝国主義は不均等発展を帝国主義間戦争へと転化しえず帝国主義列強は帝国主義間対立を構造化させながらも、米帝の侵略反革命戦争への協力体制を形成し、国際反革命同盟を巡る反革命世界支配の再編強化として、この過程を表現した。そのことはより一層の侵略反革命の激化を意味したのである。このようなものとして60年代後半の安保、NATOの再編、強化がなされたのである。

米帝の恒常的侵略反革命戦争政策を基調と

した、60年代後半の不均等発展—侵略反革命の激化は、植民地従属国に矛盾を集中し、永続的な階級危機を形成したのである。

米帝は、朝鮮戦争を契機としたトルーマンドクトリン、反共封じ込め政策をもってベトナム、朝鮮を要とする分裂国家の形成、60年代インドネシア、ガーナ等の反革命軍事クーデターに示されるごとく植民地従属国に対する反共軍事独裁政権を押しつけ、それを反革命同盟の下に集約することを通じて政治軍事経済的にこれら諸国を従属せしめ、侵略反革命戦争政策の拡大を通して、植民地支配を貫徹したのである。米帝の侵略反革命戦争政策は、いわゆる帝国主義の侵略反革命の内実において一方で戦略産業—資源確保(石油・ウラン)基本的には軍事援助をもって、これら諸国に軍隊の育成—侵略反革命戦争に向けた動員体制を軸とした軍事経済化を押しはかり、それを米帝の産軍複合体へと組み込む形で搾取、収奪の体系を作りあげ、米帝の恒常的侵略反革命体制の下にこれら諸国の従属化を強制したのである。これら諸国は戦後国際的階級関係の変化に規定され、枠内において一定の政治的「独立」を認めるといふ古典的植民地支配とはその統治形態に違いを示しながらも米帝戦略への徹底した従属、国民経済の自立性を一切否定され、疲弊させられた植民地経済を本質としており、米帝の軍事援助に支えられて始めて存立しえたのである。

六〇年代後半米帝の一元的の反革命世界支配能力の喪失は一握りの買弁ブルと大土地所有者にしか階級の基礎を有さぬ反共軍事独裁権の政治的危機を一挙的に拡大した。インドシナ人民の英雄的闘いがこれら諸国に反映することにより、反共軍事独裁政権は自ら帝国主義諸列強の侵略反革命を積極的に受け入れ、従属化、傀儡化の道を開き、反動と暴力を強化したのである。それ故、反共軍事独裁政権はプロレタリア、農民との政治的亀裂を一層拡大し、植民地従属国の階級闘争は即自的に「反帝国主義」、「反軍事独裁」という暴力的自然発生性を形成するのである。

六〇年代初頭、米帝の侵略反革命戦争政策の遂行の中で「非同盟中立」路線を内外的な基軸とした植民地従属国政府は民族ブルの反動化(崩壊)により自己の存在基盤を喪失し、インドネシア、スカルノの「ナサコム」体制の崩壊、インドのネール「社会主義型社会」の挫折、そしてアラブ連合のナセルらの「社会主義へのアラブの道」の総破産を結果したのである。

それは、ソ連、「平和共存」戦略に基づき「後進国非資本主義的發展の道」論、中国共産党「中間地帯戦略の指導理念の総破産であったのである。ベトナム革命戦争の前進が主体的に生み出した植民地従属国の階級危機の煮つかりの中で、米帝の反革命軍事介入は民族ブルを容易に屈服させたのであり、又、市場再分割戦の過程で帝国主義列強の侵略反革命—資本投下は徹底して民族ブルを解体し、買弁化したのであり、階級闘争の主体的推進を棚上げにした経済建設至上主義として表現された「非資本主義的發展の道論」の破局は自明であったのである。又、民族ブル、農民、プロレタリアによる「広範な統一戦線」を基礎にした、反米闘争一面化、ブル民革命の自己目的化となされた「中間地帯戦略」は過渡期世界における民族ブルの性格及び国際反革命同盟を媒介とした帝国主義の侵略反革

命「植民地支配体制を何ら対象化しえず、破産の道は明らかだったのである。」

国際階級闘争の最先端に位置するベトナム民族解放戦争は武装闘争「革命戦争」という形態のみならず、ベトナム労働党の革命的核は貧農、プロレタリアに基礎を置く統一戦線、ブルシズムからプロレタリア革命への永続革命の推進、土地革命の徹底化というすぐれた内容を有している。この路線の下に革命主体を措定しきり、米帝との非和解的な革命戦争を実現した。それが今だ世界革命戦略及び永続革命の中におけるプロレタリア革命への転化の条件の明確化（スターリン型二段階戦略との分岐の明確化）という領域に不十分性を有しているとはいえず、実践的には「労働者国家」の革命戦略をはるかに乗り越えた地平で「平和」共存を突破し、国際的階級攻防の主体的根拠を形成したのである。

それは米帝を中心とした現代帝国主義の存在の基礎（統一的世界市場、植民地支配体制）そのものを根底的に脅し、同時に、帝国主義に封じこめられ存在している「労働者国家」に分解と動揺を与え、中ソ論争への直接的、間接的インパクトを形成した。

六〇年代初頭中ソ論争の開始はダマンスキ島（珍宝島）における「武力衝突」へと発展し、中ソの決定的非和解的対立へと至った。

中国共産党は、ソ連に指導された工業化政策から「大躍進政策」→「農工併進路線」へ転換し、人民公社に基づく新しい集団化を行なった。しかし、この破産は農民の政治的発露を生み、生産意欲を後退させ、毛沢東を政治的危機に追い込めた。その後、「三自一包」政策（「中国の新しいネップ」）の採用へと転換した。この過程は土地所有を拡大し、階層的格差を広げプロレタリア独裁の基礎そのものを脅した。

この内的矛盾を毛沢東は「過渡期階級闘争」論「プロレタリア革命独裁の打ち固め路線のうちに解決せんとした。毛沢東はこの路線の下で政治的巻き返しを文革「権力闘争」として実現した。文革は過渡期社会が孕む階級矛盾の克服を世界革命戦略（世界同時革命戦略）の対象化のうちに求めていたのであった。しかし、それは十分に対象化されず、文革は劉少奇（ソ連派）を打倒しながらも、不十分性のうちに終息を遂げた。文革の過程で打ち出された「人民戦争路線」、「国際階級闘争支援」論は中間地帯戦略の総括を戦術的左傾化のうちにしか表現しなかったのである。文革が植民地従属国の階級闘争に一定の主体的根拠を実現しながらも、一國主義の枠を取り払うものではなかった。

第三章

70年代帝国主義世界再分割戦の基本的な特徴

現代過渡期世界は六〇年代、帝国主義の植民地従属諸国での支配体制の危機に加え、七〇年代初頭、これまでの不均等発展に伴う帝国主義間対立を一挙に顕在化させ、戦後世界体制の崩壊の危機をドラスティクに進行させ、新たな世界反革命支配に向けた、帝国主義の世界再分割戦を開始した。そして帝国主義の

されない中共「国際階級闘争支援」論はその実現において一方の「平和共存」政策との間で不断のブレを生み出す内的限界をその本質に有しており、不断に外交政策的レベルへと引き下げられるのである。かかる路線の不十分性は「十全大会」、周体制の確立を通して「平和共存」政策の全面化を生み出し、ソ連共産党との党派闘争を世界革命の積極的推進のうちに対象化しえず混迷を深めている。

ソ連は全欧安全保障会議、SALTの批准を通じて露骨な帝国主義との協調を謀り、帝国主義の侵略反革命によってたらされる体制内の階級矛盾をチェコ、ポーランドなどへの軍事的締め付けをもって乗りきり自国の経済建設至上主義への従属を強制し、帝国主義との協調の上にアジア安保「中国封じ込み」を自己目的化するに至った。

インドシナ民族解放戦争の前進は既に国際階級闘争を「平和共存」の枠に封じこめることを不可能にし、ソ連、中国共産党の路線の破綻を白日の下にさらし、ソ連・中国は階級闘争の前進の前に、自己の内的矛盾を拡大させながら増々混迷の淵を歩む以外にないのである。

安保NATO国際反革命同盟の再編へ至る過程は、帝国主義の寄生と腐朽の爛熟の過程であった。

帝国主義は、IMFJCに示される帝国主義労働運動を育成し、社民の基盤を解体し、社民・共産党に帝国主義との同盟を迫り、議会への組み込みをもって帝国主義の侵略反革命の承認を取付けたのである。帝国主義の寄生と腐朽の進行は帝国主義内の階級分化を徹底して押し進め、帝国主義の最下層に被抑圧人民を固定し、差別・排外主義、人民分断攻撃を拡大した。インドシナ革命戦争は抑圧された人民の大衆の暴力性を引き出し、沖繩人民、黒人IRA等被抑圧人民、大衆の闘いは激裂に展開され、自然発生的にはあれ反帝国主義、帝国主義打倒を対自化し、帝国主義の胎内に革命的翼を生み出した。帝国主義国内労働運動の腐敗、墮落、社会排外主義的統制の対極に登場した「国際主義と暴力」を掲げた革命派の闘いは議会主義幻想を打ち砕き、主要には学生層という限定された枠を中心としながらも、「自国帝国主義打倒」に向けた鋭い暴力性を表現した。

米帝の反革命世界支配の破綻は帝国主義の植民地支配体制の危機を全面化させ、インドシナ革命戦争の国際的な波及力は、侵略反革命の更なる強化のうちにしか延命の道を見い出せぬ帝国主義に帝国主義軍、隊の形成はもとより、国内階級闘争の粉砕に向けた予防的先行的権力再編「上からの内乱」を決意させたのである。

経済的力量を基礎に、中国・朝鮮・ベトナムを先頭とする民族解放「革命戦争」、先進国階級闘争、世界革命の根拠地たる「労働者国家」群の歴史的前進、高揚、登場に規定されつつ、これに反革命的に對抗し、帝国主義列強を国際反革命同盟へと組織し、旧植民地従属諸国をこの帝国主義体系の下に収約し、「労働者国家」を封じ込めた世界反革命体制である。つまり米帝を盟主とする帝国主義列強は国際反革命の形成、スターリニズムのそれへの補充、屈服に支えられた世界反革命支配を基礎に、ドルを国際通貨としたIMF・GATT統一的世界市場を再建し、戦後一貫して、植民地支配体制の強化、拡大を通じ侵略、搾取、収奪をほしきままにすることによって自らの帝国主義的發展を維持してきた。

しかし、帝国主義の世界反革命支配、これこそ世界革命の中途挫折、第二次帝国主義侵略戦争の国際的危機をスターリン・コミンテルン・コミンフォルムの「反革命」的補充と屈服によって助けられ延命して成立した戦後「ヤルタ」分割「ジュネーブ」和平「協定」、米ソ平和共存体制は六〇年代を通じてその根底から解体的危機を顕在化させ、七〇年代、再々度の帝国主義世界再分割戦の真只中で、その主体的・客体的根拠を完全に喪失しつつある。

70年代世界再分割の基本的特徴

現代過渡期世界の六〇年代特徴は次の諸点に端的に示されている。

まず、帝国主義の反革命世界支配の再編、盟主・米帝の後退、破綻、決定的敗北である。帝国主義の再建、重化学工業の育成による金融寡頭制支配の確立による、設備投資主導型の高蓄積様式を終焉させ、帝国主義の不均等発展の激化による、米帝の後退、日帝、西独帝の拾頭、他帝国主義の停滞をもたらし、ドル危機を構造化させ、IMF、GATT体制の解体を結果させ、とりわけ、植民地従属諸国における階級の危機と民族解放革命戦争の進展に対する侵略反革命戦争の強行の決定的敗北、ヤルタ「ジュネーブ」体制への封じ込めの破綻、南北分断、固定化策動の総破綻、等々である。

次に、帝国主義の戦後的發展を支えた植民地体制の破局的危機の進行である。

キューバ革命、ベトナム・インドシナ解放闘争、パレスチナ解放闘争、アフリカにおける独立運動の前進に示される、後進国、植民地従属諸国における民族解放「革命戦争」の不可避的發展、更に、かかる闘いの勝利的前進の客体的、結果的基礎となった、慢性的経済危機、政治的、階級的危機の全面的進行、かかる事態、内戦の勝利は後進諸国の支配階級をして更なる植民地化、従属化、カイライ化の道を選択せしめ、クーデターによる反共軍事独裁政権を登場させ、そのことによつてのみ維持され、五〇年代に特徴的であった、非資本主義的發展（ソ連派）、中間地帯論（

中共派）の完全な破綻を証明するに至った。革命キューバの樹立を契機に、国際反革命盟主、米帝はケネディをして植民地支配体制の維持・強化のために反共軍事独裁政権を次々と樹立させ、軍事援助を与え、インドシナへの軍事的介入、軍事的敗北の泥沼的過程、

決定的敗北をこうむり、帝国主義の不均等発展の激化と相まって、他帝国主義への「肩代り」1日帝、西独帝の侵略反革命、国際反革命の再編へと事態を深めていった。

すなわち、六〇年代国際階級闘争の環、民族解放1革命戦争は反革命世界支配の破綻を引き出し、植民地支配体制の危機は一方において反共軍事独裁政権としてあり、それが帝国主義の植民地化、従属化、かいらい化を更に一層促進することなくして自ら維持しえないということであり、他方において、帝国主義の侵略反革命、反共軍事政権の植民地化による、自国プロレタリア人民の国際反戦闘争から国際反革命粉砕、自国帝国主義打倒の政治的決起と国内階級激突を必然的に生み域内平和なき侵略反革命へと突き進まざるを得ないことである。

更に、ソ連を盟主とする「労働者国家」群内部の分解、国際的党派闘争の激化、国内階級闘争の高揚という事態である。

後進国、植民地従属諸国における革命と反革命の内戦的發展、米帝の世界反革命支配の破綻等々はスターリニスト世界戦略の破綻を明らかにし、それが一国社会主義的国内経済建設のいきづまり、破綻と相乗され、二つの国際会議（五七年モスクワ「宣言」、六〇年「声明」）を最後に、中ソ対立を激化させ、ソ連派、中共派自主独立派へと分解し、更に、ソ連の収奪機構、コメコンの危機的構造化、東欧諸国での政治的危機に対するソ連軍の介入、ワルシャワ条約機構の反動的収約、中国における文革という党内分派闘争の非妥協的展開を生み出した。ソ連共産党は戦後においても歴史的に一貫して、米帝の反革命世界支配を補完し、加担することによってのみ自らをソ連圏の盟主として君臨し、帝国主義の植民地従属国での内戦的發展に帝国主義的平和を強制し米帝のあるところ必ずソ連があり、ソ連のあるところ必ず米帝が存在するという許し難い存在である。

現代過渡期世界の六〇年代諸様相はまさに戦後世界体制の崩壊の危機をあらゆる意味において準備し、とりわけ、民族解放1革命戦争を基軸とする国際階級闘争の一大高揚をつくり出し、帝国主義の国際反革命に真向うから対決する世界革命の第三潮流を確固として浮上せしめるに至ったと確信しえるのである。

我々は七一年ニクソン前大統領の「二つの声明」以降、全面的に露呈した戦後世界体制の危機の様相を帝国主義の世界再分割戦としてその基本的性格をはっきりと把え返し、世界革命、三ブロック階級闘争論を豊富化し、七〇年代を単なる三〇年代のラセン的回帰論で事足りたりし、帝国主義の本質を否定する、恣意的協調の深化のみを基礎とする共同反革命論を克服していかなばならない。

現代帝国主義の世界再分割戦、侵略反革命戦争は如何なる性格をもっているのか。

それは第一に、現代過渡期世界の歴史的特殊性、国際反革命1統一的世界市場の政治的防衛を自らの世界反革命支配と自らの延命の基本的、死活の条件とせざるを得ないという枠内で貫徹していかざるを得ないこと、しかも、六〇年代国際階級闘争に示された如く、アジア・アラブ人民を先頭とする革命戦争の前進に国際反革命最大の軍隊、米帝の軍事的敗北と戦略的根拠地の拡大、世界革命戦争の攻勢的發展の段階において開始せざるを得ないという歴史にかかって経験したこのない

絶望的世界再分割戦としてある。

従って、第二に、世界再分割戦の決定的に重要な基軸である、列強内覇権争いは帝国主義間戦争による結着として発現することなく、あくまでも国際反革命同盟の強化をめぐる覇権争闘として貫徹せざるを得ず、他方、かかる再編を通じ、植民地従属諸国、対「労働者国家」群への侵略反革命戦争として全面化する事となる。

そして、第三に、米帝を除く如何なる帝国主義列強もかつての世界憲兵としての役割を果しえず、帝国主義間対立を統合し統一的世界市場を再建する力量をもち合わせておらず西独帝、日帝の拾頭、米帝の相対的ヘゲモニーの後退という三把え戦の展開にあつて、五〇一六〇年代の安定した世界体制と金融寡頭制の高蓄積様式を復活しえないだけでなく、今後、増々、危機を永続的、同時的に蓄積し不均等発展の爆発的事態を更に一層引き起こさざるを得ないのである。

それは最近のEC共同体内の動きを見ればきわめて特徴的である。西欧の反共のとりでたる西独帝はその強固な金融寡頭支配を基礎に不均等発展の対立と対アフリカ・中近東争奪戦を勝利的に展開し、仏帝は停滞し混乱しつつ、人民戦線派を圧倒的に登場させ、英帝は破産し、伊帝においては経済危機のみならず政治的危機を相乗化させ、ファシズム運動(MSI)を孕み、西独帝から二〇億ドルにも及ぶ借款を受けざるを得ない事態へと危機を深めている。かかる対立・抗争が結果するものはEC諸国全体に政治的危機を拡大し、経済的危機を慢性化し蓄積する以外の何物でもないのである。

第四に、帝国主義の延命と世界支配の要である植民地従属諸国における反共軍事独裁政権の腐敗と政治的危機は帝国主義の侵略反革命、軍事援助の拡大の増大ともなう一層拡大し、人民の決死の総反撃をうけざるを得ず、更に植民地人民の反帝闘争は六〇年代をうわまわするように民族解放1革命戦争へと発展し、帝国主義の政治的危機から階級的危機を激発せざるを得ないのである。

以上のことから、第五に、新たな世界制覇のために帝国主義列強は①国際反革命のヘゲモニーをめぐる軍事力の強化の抗争、②列強間不均等発展に伴う、IMF・GATT崩壊後の世界経済の縮小化1ブロックイズム、市場競争1争奪戦の激化、③植民地従属国支配のための再分割1争奪戦の激化、④対「労働者国家」群に対する帝国主義的「平和」共存への封じ込めと侵略反革命(戦争)、かかる対立、抗争、戦争を一挙に解決せざるを得ないのであり、そのためには、⑤侵略反革命、侵略反革命体制構築のための国家(統治)形態の急速な反動的革命的転換1上からの内乱・内戦の開始と軍事化された経済、産軍複合体制を基礎とした金融寡頭支配の一層の強化を不可欠の課題とし、それ以外に延命の道は一切残されていないのである。

つまり、これらは決して論ずることのできない一体化した事柄であり、帝国主義の本質に規定された世界再分割戦の根本的諸要素、性格である。帝国主義はその本質を決して修正することなく、逆に益々強化拡大するのであり、それは三ブロック労働者階級被抑圧人民の総反撃をうけ、闘う人民を結束させ、帝国主義を補完し屈服する一切の日和見主義を切り離していく。

現代過渡期世界の七〇年代様相は帝国主義の世界再分割戦の本格的開始であり、そのことの必然的国際的階級危機は自らに向けざるを得ないのであり、七〇年代国際階級闘争の焦点は民族解放1革命戦争の永続的前進と革命的に結合する帝国主義国内階級闘争の内乱・内戦的發展とならざるを得ないのである。

帝国主義の世界支配とその権力性格

配とその権力性格

現代帝国主義の世界再分割は国際反革命同盟の主導権争闘を通じた世界反革命支配の再編・強化、民族解放闘争を最頂点とする全世界の規模での階級闘争、革命闘争の高揚・発展に対する烈強間の国際的政治軍事体系の再編1権力再編をもって本格的に開始された。

六八一七〇年におけるNATO、安保反革命軍事同盟の再編こそ帝国主義列強総体の侵略反革命戦争の全世界的規模での拡大、そのための列強各国の権力再編、予防反革命、上からの内乱1内戦攻撃の決定的メルクマールを意味しており、それは必然的に国際的階級危機を一挙的に成熟させ、革命と反革命の激突、決戦を不可避とせざるを得ない。国際反革命同盟粉砕1自国帝国主義打倒を公然と掲げる革命派の登場、労働者階級被抑圧人民の決起、それに対抗する列強の破防法・非常事態法・組織解散令などの密集した反革命攻撃こそ、「戦争と革命」の時代における帝国主義階級闘争の革命と反革命の攻防、革命的発展の最も凝縮された形態に他ならない。

帝国主義の世界再分割戦1侵略反革命戦争の基本的性格を踏まえるならば、帝国主義的抑圧民族プロレタリア人民の国際主義的任務(国際反革命粉砕1自国帝国主義打倒)は決定的に重要である。七〇年代国際階級闘争の環は帝国主義国内階級闘争の革命的発展であり、革命と反革命の永続的の死闘、階級攻防の結着こそ植民地従属諸国での民族解放1革命戦争に対する侵略反革命戦争帝国主義的「平和」を突破する決定的鍵をなすのである。

まさに七〇年代中期階級闘争とは帝国主義の世界再分割戦1侵略反革命戦争に向けられた国家権力の全面的政治反動、上からの内乱(内戦)、予防反革命に反対するプロレタリア人民の政治的決起、武装決起の日常的・永続的発展の時代であり、革命と反革命の階級的激突戦へと不可避的に突き進まざるを得ない革命的の内乱(内戦)の時代である。我々はこの確信をはっきりと主体化しなければならぬ。

現代過渡期世界における帝国主義の基本的矛盾は侵略反革命戦争である。

我々は現代帝国主義の国際反革命同盟、権力性格とその再編の主要な特徴を帝国主義の世界再分割、侵略反革命戦争に見出すことができる。

侵略反革命こそ、米帝を盟主とする戦後世界帝国主義世界反革命体制としての再建を可能にし、維持しつつ、帝国主義的發展を実現してきたのであり、それは米帝の軍事経済、産軍複合体をもつてのみ可能であった。

六〇年代における国際的階級危機の前期的成熟、帝国主義の不均等発展による均等化、平等化、七〇年代における戦後世界体制の崩壊の危機、世界再分割戦のドラスタックな展開、米帝のまき返し、西独帝、日帝の世界反革命

支配への積極的・必然的登場、これら帝国主義列強の力関係の再編、統一的世界市場の破局、争闘こそ帝国主義列強をして軍事スペンディング政策を基軸とする軍事経済化を促進させ、全世界的規模での侵略反革命戦争を全面化せざるえないのである。

即ち、七〇年代以降の帝国主義の基本的矛盾の成熟、覇権争闘、経済的争闘、植民地支配の再分割の激化、統一的世界市場の根底的空洞化、のなかにあって、帝国主義列強は五〇・六〇年代の経済的発展の根拠を喪失し、益々過剰となる資本の処理を軍事スペンディングによる軍事経済へと転化させ、産軍複合体とそれによる国家的統制という金融寡頭制支配の最も高度な、最も危機的形態へと移行していかざるえず、政治的・軍事的矛盾と一体的に結合させ、侵略反革命戦争の永続的発現の内的根拠を完成させていくのである。

更にまた、植民地支配体制の危機、民族解放・革命戦争の絶対的勝利、三プロック階級争闘の攻撃的前進という国際的階級危機の成熟、その急速な煮つまりという事態に規定されて増々、侵略反革命戦争を促進させていかざるをえない。

帝国主義の世界分割の全面化は米帝の一元的支配へと回帰することなく、他の列強をしてかかる危機的形態へと転化させ、侵略反革命戦争体制へと移行させ、その行きつく先は、国際反革命同盟の主導権をめぐる永続的な再編を基礎に、植民地再分割、対「労働者国家」への侵略反革命戦争の全世界的拡大へと突き進み、予防反革命権力再編を促進させ、国際的政治危機、階級危機を激化させる。

帝国主義の世界再分割の七〇年代の様相の必然的結果は第一に、かつての産業構造における重化学工業化の再建、確立を基礎とする不均等発展による均等化から新興、没落帝国主義の決定的分化、総体としての危機的同質化へと推移し、更に、米帝型の産軍複合体へとその政治経済的基礎を転化させ、第二に、NATO、安保軍事同盟の再編を突破口とする列強の力関係に伴う国際的政治軍事体系の新たな再編、その下への植民地従属諸国の支配体制の構築へと再分割し、侵略反革命戦争を永続的に引き起こし、第三に、かかる帝国主義の全世界的侵略反革命戦争が「労働者国家」を全面的にまき込み、世界革命を放棄し、プロ独をさんだつするスターリニスト党官僚体制、ワルシャワ条約機構、コメコン体制の階級の危機を更に決定的に促進させていかざるをえないのである。

ともあれ、われわれは、現代帝国主義を基礎とする国際反革命同盟、帝国主義権力の性格を次の如く規定しえる。

すでに、明らかのように、現代過渡期世界は帝国主義プロレタリア人民の革命争闘の発展、植民地従属諸国被抑圧人民の民族解放・革命戦争の永続的発展、「労働者国家」革命的な人民のスタ官打倒・プロ独復活・世界革命の根拠地化の争闘・かかる三プロック労働者被抑圧人民の闘いが帝国主義侵略反革命戦争の内戦・世界革命戦争への転化、世界革命・世界プロ独樹立の闘いとして結合していく時代、世界過渡期への革命的移行の時代、帝国主義と共産主義(社会主義)の世界史的激闘の時代である。

現代過渡期世界の国際的階級争闘の性格と階級危機の永続的成熟に規定され、現代帝国主義は列強間の国際的政治軍事体系を実現し、

国際反革命同盟の下に三プロック階級争闘を革命的に封じ込めることを帝国主義的世界支配、帝国主義の発展、存続のための基本的条件、不可欠の前提とせざるえない。

実際、国際反革命同盟は核兵器を頂点とするあらゆる軍事的手段を備え、対「労働者国家」との全面戦争、後進国、植民地従属国への侵略反革命戦争、帝国主義国内革命争闘、内乱(内戦)への出動として体系化され、単一の統合同司令部の下で共同軍事訓練を行い、文字通り国際的な常時侵略反革命戦争体制として編成されている。まさに、国際的な予防反革命である。これが第一の特徴である。

そのことは第二に、国際反革命同盟が列強間の力関係に基いて革命に対する相互規定的な先行的反革命として存在していることなであり、米帝の侵略反革命戦争の決定的軍事的敗北に象徴される国際的な革命と反革命の力関係の転換という現実、帝国主義世界再分割の展開により列強内部の力関係の再編という事態にあって国際反革命同盟の再編に基いて強化と各国権力再編が同時一体的にまさに先行的権力再編として全面的に展開され、全世界的侵略反革命戦争へと拡大されているのである。

第三に、みておかねばならない点は帝国主義の植民地支配様式についてである。現下の後進国植民地従属諸国は戦後米帝の植民地独占の下で、支配様式の解体的危機を永続化し、その階級争闘の内乱・内戦への発展のなかで、革命的翼として臨時革命政府・民族解放・革命戦線、反革命的翼として反共軍事独裁政権へと完全に分解している。帝国主義の世界反革命支配、国際反革命同盟の下でしか自らを存続しつづけることのできないこの白色政権は植民地再分割戦(米帝の植民地独占、特にアジアからの後退)のなかで、

第四章

日帝の侵略反革命と国家形態のボナパ的転換

日帝の侵略反革命(朝鮮植民地化攻撃)侵略反革命体制構築は国家権力の再編、国家(統治)形態の反革命的転換、階級関係の反動的再編として展開され、日帝のプロレタリア人民への経済的攻撃、差別・分断攻撃、政治的攻撃はボナパ反革命攻撃としてその予防反革命的な性格を増々明確にしてきている。

我々は日帝の侵略反革命の基本的内容、帝国主義の七〇年代世界再分割の必然的過程と帝国主義世界支配、現代過渡期世界における帝国主義国家権力の予防反革命的な性格を踏まえ、更に、日帝のボナパ反革命攻撃、国家形態のボナパ的転換、その階級の性格を次に検討していく必要がある。

国家形態のボナパ的転換

換の根拠と政治的意義

これまで国家(統治)形態の歴史的役割、その階級の性格、国家形態の移行、転換の政治的意義について多く論じられてきた。

マルクスのフランス階級争闘の考察、エンゲルスのドイツ階級争闘の分析、レーニンのロシア革命におけるストライキン政権、ケレ

増々、植民地化、従属化、かいらい化を深め、国内支配において、共産主義のみならず一切の民主主義をも否定するフアッシュョ統治へとその危機を促進させ、国内経済(建設)において完全に各帝国主義勢力圏へと抱擁変質化し、国際反革命軍事同盟の再編と一体化し反革命軍隊の近代化を絶望的に押し進めんとしている。

我々は帝国主義世界支配のための先行的権力再編、①国際反革命同盟、②帝国主義権力、③反共軍事独裁政権等が決して個々バラバラでなく同時一体的再編として具体化され、しかも、それが帝国主義の基本的矛盾の貫徹、七〇年代世界再分割・全世界侵略反革命戦争への全面的転化として展開されていることをはっきり把握せねばならない。

現代過渡期世界における帝国主義の世界支配、植民地支配様式に関する多くの誤った傾向、侵略反革命を否定し経済的観点からのみの考察、帝国主義の修正をはかり、後進国植民地政権の政治的独立を論証するための一国的・民族的観点からのみのおそれやこれやの権力規定、レーニン「帝国主義論」の本質を時代おくれのものとして清算し、その一側面を肥大化する諸見解・これらはすべてレーニン主義の冒瀆であり、社会排外主義、敗北主義、近代主義への墮落である。

帝国主義七〇年代世界再分割戦、戦後世界体制の崩壊こそ、文字通り、侵略反革命戦争を世界革命戦争へと転化する物質的条件を生み、国際的階級危機を成熟させ、帝国主義国、植民地従属国、「労働者国家」、三プロック階級争闘を結合させざるをえないのであり、七〇年代国際階級争闘こそ、「革命的内乱・蜂起・内戦」「民族解放・革命戦争」「スタ官打倒・プロ独復活・世界革命根拠地」へ飛躍させ、結合する世界史的任務が問われている。

ンスキー内閣の権力性格の諸規定、等々である。

そこにおいて、国家形態は①国家、国家権力の階級の性格、②政治権力の構造、統治の実体的基礎、③階級関係とそれを規定する諸階級の社会経済構成、政治経済構造、④国家形態と階級争闘の関係、諸階級の権力争闘の性格、等として解明され、国家論、革命論上の諸原則が貫かれ、豊富化され、国家権力規定、国家形態をめぐる階級争闘の性格が、きわめて具体的に展開され、当然の事ながら革命の任務が実践的に提起されている。

国家形態とは「階級争闘がその中で行われ、又、階級争闘の結果がそれに総括されていく形態」である。

歴史的に見るならば、立憲君主制は「封建領主とブルジョア」との決定的争闘を容易にする国家形態であり、共和制は「ブルジョア」と「プロレタリアートの争闘」を最も鮮明にする国家形態である。

では、ボナパ国家形態とは、如何なる階級争闘がその中で闘われ、又、如何なる階級争闘の結果がそこに総括されている形態であるのか!

戦 旗

まず、ボナパルティズム権力（国家形態）の基本的性格、その目的、その階級的基礎、基盤、等についての原則上の事がらを踏まえておかねばならない。

ボナパルティズムは、すでに一九世紀中葉フランス革命、一九一七年ロシア革命、二〇一三〇年代ドイツ革命に示されたように、革命の現実性、プロレタリアートの権力闘争への公然とした革命的決起、登場に對抗する、ブルジョア独裁のための内乱期における特有な反革命統治形態である。

内乱とはいうまでもなく、階級闘争の革命的発展の自然の産物、諸階級とその闘争との一定の相互関係の必然的結果であり、それは諸階級の公然とした権力闘争への登場、開始を意味し、革命と反革命の階級的衝突、階級闘争の平和的、合法的段階から暴力的、非合法的段階への移行をその決定的メルクマールとする。

ボナパルティズム国家形態は「過渡期の例外的国家」（いわゆる例外国家論）であるとか、後進資本主義の特有の国家であるとか、「民主主義的な環境はボナパルティズムとは相いれない」等の諸規定はすべて誤りである。それは産業資本主義段階、帝国主義段階、過渡期世界、をとわず、階級闘争の必然の結果としての内乱時代、革命闘争の内乱期において成立の可能的根拠をもつ反革命的国家形態だからである。

従って、この国家形態の政治的意義は内乱の革命的・反革命的結着であり、プロレタリア人民による内乱の公然化に對抗し、超階級の幻想をふりまきつつ、内乱の回避、反革命鎮圧、域内平和の防衛を主要な目的とする予防反革命的な性格をもつ過渡的な形態である。

しかも、現代過渡期世界における帝国主義の世界支配―国際反革命同盟、予防反革命的な権力性格を踏まえるならば、ボナパルティズムの性格は、「内乱の回避、鎮圧、域内平和の防衛」―を主要な目的とするのではなく、内乱以前における革命の解体を主要目的とする予防反革命としてあるということである。

先きにみたように、帝国主義列強は七〇年代世界再分割戦の必然的過程として全世界の侵略反革命戦争（体制）へと突き進んでおり、そのための一切の準備をすでに開始している。五〇一六〇年代の「議会制民主主義」という国家形態はすでに過去のブルジョア独裁の形態にすぎず、国際的階級危機の急速な成熟、国内階級闘争の革命的高揚、政治的経済危機の破局的展開という諸条件のなかにあつて、侵略反革命戦争のための権力構造―国家形態への転換がすでに日程ののぼっている。現在はその転換に向けた過渡であり、そうであるが故に、革命の圧殺・解体を主要目的とする予防反革命の先行的権力再編、国家形態のボナパルティズム的急激に煮つまっているのである。

ボナパ独裁体制の本質とその階級的性格

次に、ボナパ反革命の階級の基礎、その反革命的支配についてみていく。現代帝国主義列強は自らの世界支配をその要である国際的政治軍事体系を基礎に貫

徹しており、各国帝国主義の世界支配の野望もかかる国際反革命同盟の再編強化として実現する侵略反革命戦争である。

日帝の世界支配のための侵略反革命は日米安保の再編（七〇年）、沖縄の反革命的統合、自衛隊の海外派兵（七二年）、そして、七二年以降の朝鮮植民地化攻撃の全面的展開として具体化され、四次防、五次防の国内軍需産業の育成・確立、反共軍事独裁政権の軍隊近代化へのテコ入れを通じた軍事化された経済産軍複合体への移行を開始し、国内支配秩序の暴力的転換、政治的攻撃の強権的促進、プロレタリアートの政治的解体、小ブル諸階級の国家的統合・革命の圧殺を目論む予防反革命―先行的権力再編を公然と開始した。

日帝の国家形態の転換、議会制民主主義から、侵略反革命戦争―ファシズム権力への一大飛躍、それへの過渡、ボナパ反革命攻撃こそ、一方における、自らの世界支配―侵略反革命戦争体制―産軍複合体への反革命的発展にびたりと照応する形態であり、他方における植民地従属諸国の反日（帝）闘争、民族解放―革命戦争の永続的発展、国内階級闘争におけるプロレタリア被抑圧人民の政治的決起の始まり、革命の高揚、諸階級、諸階層の政治的亀裂の進行、革命と反革命の階級の衝突の不可避的発展に予防反革命的に對抗する形態である。

そうであるが故に、日帝権力は第一にボナパ的政治攻撃をもって、警察的、官僚的、軍隊的独裁によって事態を支配せんとしているのである。

すなわち、革命の現実性、革命と反革命の階級衝突、不可避的発展を基軸とする、支配階級と被支配階級、搾取者と被搾取者、有産者と無産者、差別者と被差別者の闘いが最高度の緊迫状態に達し始めるやいなや、反革命の側は警察・官僚・軍隊を唯一の拠りどころとし、そこに自らの反革命的支配の決定的支柱を置きはじめるのである。

第二に、日帝の侵略反革命戦争体制への転換はプロレタリア人民の政治的解体、そのための社民の帝国主義的（社会）排外主義への統合、反革命統治形態への完全な屈服、左翼的補完物への変質を実現することを絶対的課題とせざるえないのであり、これを自らの反革命的支配へと吸収するのである。

すなわち日帝は警察・官僚・軍隊的独裁の強化、ボナパ的政治攻撃をもって、革命の圧殺・解体をおしはかり、他方、社民、日共を使って、内乱の回避、鎮圧、域内平和の防衛を実現せんとするのである。

それは三〇年代ドイツ革命の敗北をみるまでもなく、敗戦後の日本革命の敗北、その後の帝国主義的発展をみれば一目瞭然であるだろう。

在日朝鮮人の革命的決起をもって始まり、2・1ゼネスト体制―階級激突戦へと登りつめたプロレタリア人民の革命的闘いは朝鮮人民の民族解放―革命戦争と何ら連帯結合することなく、階級激突戦―革命的な内乱、蜂起―内戦―世界革命戦争へと発展することなく完全に敗北した。

我々は世界革命の基本原則、革命の基本戦略・戦術的総路線を放棄した日共の反革命の本質をここに充分みることができ、又、その後の帝国主義のレッド・ページに積極的に加担し、朝鮮への侵略反革命戦争を全面的に支持し、その後の帝国主義的発

展を一貫して支えてきた社民の反革命本質を同様に見てとれる。

そして、戦後革命の敗北を基礎に、日帝は帝国主義的発展、重化学工業化の確立を通じて反共を旗印とする帝国主義的労働運動を育成し、労働運動の反共反革命的再編を一貫してつくり出してきた。

今や日帝はプロレタリアの政治的解体にとどまらず、民社党、同盟、IMF・JICを反共突撃部隊として組織化し、侵略反革命の最大の尖兵として育成し、これを自らの反革命支配の最大の階級の基礎としているのである。

第三に、日帝は帝国主義的労働運動を基礎に、プロレタリアートを反共突撃隊へと組織化し、更に、小ブル諸階級の反共、反革命への国家的統合を大胆に押し進め、私有財産の防衛を反革命宣伝し、かかる諸階層を反共突撃隊として積極的に獲得せんとするのである。帝国主義のこれまでの階級支配の危機、体制の危機という事態のなかにあつて、小ブル諸階層（都市中小商工業者、農民等）は一方において階級闘争の革命的発展に恐怖し、政治的動揺と混乱を先行的に開始し、市民社会総体の階層的利害の衝突、失業、生活不安の絶望的状态への煮つくり、転落に直面し、きわめて急進化された、排外主義へと自らを純化する傾向を孕んでいる。他方において、彼らは戦前恐慌下においてみられた如く小政党を組織し、その矛盾の予先を「財閥」解体、独占資本打倒、ブルジョア諸政党紛砕に向け革命政党と切断されつつも、労働運動との結合を求め、独自の政治的、経済的要求を掲げ、小ブル民主主義を徹底化させており、急進的傾向を同時に孕んでいる。

日帝は国家（統治）形態のボナパ的転換の反革命同盟軍として小ブル諸階層、小ブルジョア化した一部のプロレタリアを位置づけ、反革命の空襲隊へと組織化し、排外主義・国家主義を高揚させ、プロレタリアートに對抗する最大の反革命支柱にしていくのである。すなわち帝国主義をその本質とするボナパルティズム権力は歴史的に一貫して、警察・官僚・軍隊的独裁を反革命支配の基軸にすえ、超階級の幻想をふりまきつつ、金融ブルジョアジーの反革命同盟軍として小ブル諸階層、小ブル化したプロレタリア層を結集させ、反革命の尖兵へと組織化することを自らの延命の不可欠の課題とせざるえないのである。

第四に、ボナパ反革命は革命政党―革命派の非合法化、圧殺、そのプロレタリア人民への政治的、組織的影響の切断を自らの階級支配の前提とし、革命と反革命、プロレタリアートとブルジョアジーの非和解的対立を頂点とする諸階層の階級的利害の対立、闘争に對し超階級的に介入し、すべてを治安問題（政策・弾圧・体制）として全面化させ、政治的行動を露骨に強め、革命の圧殺、解体、内乱の回避、鎮圧、反革命突撃隊の強化、拡大を促進させていくのである。

ボナパ権力への移行、成長の基盤は内乱直前の階級関係、そこにおける革命と反革命を二大基軸とする一定の階級の均衡状態をその典型とする。それは反革命が革命を一挙に解体、圧殺するだけの力量を未だ確立しえていない、逆に、革命も反革命を打倒し、自らを革命的な内乱―蜂起―内戦へと高める力量をつくり出していないということであり、かかる状態において、支配階級のボナパ的政治攻撃は革命党とプロレタリア人民との革命的結合を分

旗 戦

断することにその主要な環を設定し、革命政
 党の非合法化、圧殺をまづもって追求するの
 である。

ボナパ反革命の開始、成熟の具体的過程は
 階級闘争の、革命と反革命の具体的攻防に規
 定されるものであり、しかも、単に一国的規
 模においてのみならず、国際階級闘争の発展
 において規定されるものであるが、それは内
 乱の最終的結着、即ち、革命の勝利としての
 蜂起・内戦Ⅱ世界革命戦争か、反革命の勝利
 としての侵略反革命戦争、フアシズム的国家
 形態かを必要とする言わばきわめて「過渡的
 な国家形態」である。

すでにみてきたように、日帝は「上からの
 内乱」、ボナパ反革命攻撃を開始している。
 それは侵略反革命、侵略反革命戦争体制、産
 軍複合体制を統一的に貫徹するためのフアシ
 ズム国家（文字通り、内戦期の反革命）を準
 備するためのものであり、そのために、革命
 の圧殺、解体を自らの絶対的任務とすること
 社共人民戦線を手段にプロレタリア人民の革
 命的決起を封じ込ませ階級闘争の内乱的発展
 を回避、鎮静化させること、そして小ブル諸
 階層、小ブルに化したプロレタリアートを反
 革命同盟軍として反共突撃隊へと結集させる
 こと、更に、プロレタリア人民の総反撃を粉
 砕する最大の手段、警察、官僚、軍隊独裁体
 制の確立を主要な反革命的課題とするもので
 ある。

確かにボナパ国家形態は完成された形態で
 はない。しかしそれはあくまでも「議会制民
 主主義」形態からフアシズムへの過渡、すな
 わち平和・議会・民主主義を戦争・独裁・暴
 力へと転換させ完成させるための歴史的役割
 をもった帝国主義政府であって、単なる中間
 政府ではない。従って帝国主義のボナパ反革
 命攻撃、政治的攻撃―差別・分断攻撃―経済
 的攻撃は階級闘争の発展に規定された防衛的
 攻撃だけでなく、明確な反革命的任務をもつ
 た先行的、予防反革命としてあり、その歴史
 的・政治的意義はきわめて大きい。

侵略反革命体制構築
とボナパ反革命攻撃

以上を踏まえ、更に、ボナパ反革命攻撃と
 その支配の諸特徴を明らかにしておく。

それは、第一に、「膨大な官僚・軍事組織
 をもち、多くの層に分れた精巧な国家機構を
 もった執行権力」への一切の権限・権力の集
 中化、執行権力の専制的支配としてあらわれ
 る点である。それは執行権力の自立化・肥大
 化した力としてブルジョア社会の秩序、私有
 財産の防衛を全ての使命とする。

第二に、それは立法権力に対する執行権力
 の勝利にせしめられる如く、議会を空洞化さ
 せ、少選挙区制攻撃をもって文字通りおしゃ
 べりの場とし、政党の完全なる無視、議事か
 らの完全な独立としてあらわれる点である。す
 らで、議会はブルジョア独裁を貫徹しえる決
 定的道具としてなく、諸階級の政治的・経済
 的対立を調整し、階級対立を鎮静化する道具
 ですらなくなっているということである。

第三に、内閣―執行権力の専制的支配に基
 づく、政治的行動の全面化、反動諸立法、法
 体系のなしくずしの改悪、選挙制度の改悪攻
 撃、これらがいわゆる「上からの内乱」攻撃
 の一環として系統的に具体化されてくる点で

ある。即ち、司法権力は完全に執行権力に統
 合され、警察・軍隊の独裁体制の法的な支柱
 として機能し、治安弾圧体制へと動員され、
 法治国家の名の下に、フアシズム法体系を準
 備し、合理化していくのである。

第四に、警察・軍隊の独裁、帝国主義軍隊
 の確立と治安訓練・出動による治安弾圧・戒
 厳令体制の恒常化、そして、国家総動員体制
 の確立に向けた平時からの市民社会総体への
 治安政策の貫徹としてあらわれている点であ
 る。即ち、警察―機動隊のみならず、帝国主
 義軍隊―自衛隊の内乱に向けた治安出動体制
 の確立、新国家総動員体制のための平時から
 の社会の兵営化としての国民総番号制の着
 手、その先取り攻撃としての個人の各種の番
 号化（自治体等各行政部門）、これらはすべ
 て侵略反革命戦争体制の構築の具体的攻撃と
 してすでに確立し、又、日程にのぼっている。
 更に、決定的には、在日アジア人に対する日
 帝の日常的治安弾圧体制を許していることを
 痛苦に把え返していかなばならない。

第五に、戦後民主主義の全面的否定・空
 洞化、国家主義的な諸々ないデオロギーの宣
 伝・押しつけ、教育体系のなしくずしの改悪、
 更に、帝国主義的差別イデオロギーの徹底し
 たもち込み―これらの思想攻撃に示される帝
 国主義侵略反革命戦争の合理化・反共イデオ
 ロギー、他民族抑圧イデオロギー等の一挙的
 確立を為さんとしている点である。

第六に、反共、国家主義、戦争、差別―抑
 圧イデオロギー、暴力キャンペーンをテコと
 した大衆の大胆な組織化と治安弾圧体制への
 組み込み、反共突撃隊への育成、小ブル階級
 層、諸階級の反革命同盟軍化、労働者階級の
 政治的攻撃、差別・分断攻撃、経済的攻撃
 による政治的解体と社会排外主義の育成、等
 々を超階級の幻想、国家・民族の美名の下に
 一挙的に組織化せんとしている点である。

現在、日帝は朝鮮植民地化攻撃をこれまで
 の経済的侵略の体制的確立にとどまらず、更
 に政治的にも軍事的にも急速に促進させ、国
 会においては、朝鮮侵略反革命を諸野党に承
 認させることを通じて反共攻撃を強め反共体
 制への線み込み分断を促進させ、更に、反動
 諸立法―小選挙区制攻撃をもって、その政治
 的支配体制の反革命的再編を目論み、再度の
 自民党独裁体制を実現せんとしている。それ
 て、この反動諸立法―小選挙区制攻撃こそ、
 戦後の議会制民主主義政治支配体制の終焉を
 最後のにつげしらせるものであり、四次防
 五次防の確立をもってする日帝の侵略反革命
 戦争体制、国家総動員体制、産軍複合体制の
 総仕上げに向けた決定的な突破口を意味する
 ものであり、それは文字通り、「上からの内
 乱」―反革命攻撃、ボナパ反革命攻撃としてそ
 の反革命の本質があるのである。

日帝は七〇年代世界再分割戦の必然的・積
 極の結果としての侵略反革命、日米安保同盟
 の再編によるアジア盟主への登場、沖繩の帝
 国主義的革命的統制、朝鮮植民地化攻撃、
 そして、同時一体的に侵略反革命体制の構築
 へと突き進んでおり、そのために国内階級支
 配の要を警察・官僚・軍隊の独裁体制への国
 家形態・権力構造の移行をもって為さんとし
 ており、更に又、日帝は植民地従属諸国人民
 の反日（帝）闘争、民族解放―革命戦争の勝
 利的前進、国内プロレタリア人民の反撃、武装
 決起、政治的決起の着実な前進に直面し、諸
 階級の政治過程への公然とした登場を前にし

て、既成諸政党的反共体制へのくみ込み、
 「上からの内乱」攻撃、小選挙区制攻撃を
 もって対抗せんとし、それ以外に国内階級
 支配の一切の手段を失っているからに他な
 らない。

すでに明らかのように、日帝は議会制民
 主主義から侵略反革命戦争体制、フアシズ
 ムへの転換の過渡として、ボナパ反革命攻
 撃をすでに開始し、唯一の拠りどころ、警
 察・官僚・軍隊の独裁へと移行し始めている
 のである。

我々は以上の結論として七〇年代中期階
 級闘争は不可避免的に、革命と反革命の階級
 激突へと発展し、革命的な内乱―蜂起・内戦
 Ⅱ世界革命戦争かボナパ反革命―フアシズ
 ム―侵略反革命戦争かが問われる決定的時
 代としており、それ以外の道はないことを
 はっきりと確信していかなばならない。

結 語

我々は「カクマル主義者との訣別（序）」
 （戦旗342号）において、日向一派のレ
 ニン帝国主義論の修正、過渡期世界論の
 解体、三ブロック・テーゼの清算のカクマ
 ルの本質について我々自身の自己批判とし
 て明らかにしてきた。

そして、本文において、現代過渡期世界
 の歴史的特徴を踏まえ、帝国主義の世界再
 分割戦、世界支配、恒常的・全世界的侵略
 反革命戦争の基本的・必然的・不可避的性
 格を確定し、更に、かかる帝国主義の基本
 的矛盾と国際階級闘争の攻勢的前進に規定
 され、日帝の侵略反革命と一体化した国家
 形態のボナパの転換、プロレタリア人民に
 対するボナパ反革命攻撃の諸特徴を論じて
 きた。

結論的にいえば、我々は現代過渡期世界
 の六〇年代の様相、国際的階級危機の前期
 的成熟と植民地従属諸国の被抑圧人民の民
 族解放―革命戦争の永続的發展に加え、帝
 国主義の七〇年代世界再分割戦の恒常的・
 全世界的侵略反革命戦争としての発現の必
 然性との関係において、戦後世界体制の崩
 壊の危機の進行と全世界的規模にわたる政
 治経済的危機の激発、階級的危機の爆発と
 革命的情勢の本格的成熟を確定しきり、特
 に、帝国主義国における革命と反革命の階
 級激突の不可避的性、帝国主義権力のボ
 ナパの独裁からフアシズム的独裁体制に向
 けた「上からの内乱」―反革命攻撃の予防反
 革命的な性格と先行的権力再編の反革命的な
 本質を把えきらねばならないということであ
 る。

それ故、かかる内容において、我々は革
 命の基本戦略・戦術の総路線を堅持・発展
 させ、革命的戦術を確定しきり、日帝打倒
 の旗の下、革命的な内乱―蜂起・内戦の大道へ
 へ突き進み、帝国主義の侵略反革命戦争を
 世界革命戦争へ転換させねばならない。

帝国主義の侵略反革命に抗し、国際的階級
 危機を世界革命に転化せよ！沖繩解放―安保
 粉砕―日帝打倒！日帝の朝鮮植民地化攻撃阻
 止、南北分断固定化策動粉砕、日帝―朴体制
 打倒、南北革命統一闘争アジア人民と連帯
 し、日帝の侵略反革命を攻撃的国内階級激突
 戦に転化せよ！！